
生徒会の一存～もう一人の優良梓～

那家乃ふゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の一存〜もう一人の優良枠〜

【Nコード】

N3827Q

【作者名】

那家乃ふゆい

【あらすじ】

私立碧陽学園生徒会書記・二人目の優良枠である紅葉あかば蓮れん。そんな彼と生徒会役員達の甘く悲しい生徒会ラブコメです！

「蓮先輩♪」「真冬は今日も可愛いなあ」「コラ、イチャイチャしないてください」「鍵がマトモなこと言ってる……!」「あらあら、大変ね。……原作ブレイクが基本だけれど、楽しんでもくれると私達も嬉しいわ♪」

祝・二十万アクセス突破！ 読者の皆さんありがとうございます！

存在しないプロローグ（前書き）

書いちゃいました（笑）

まあのんびり進めていこうと思うんでよろしくお願いします。

存在しないプロログ

ルール1 神の存在を受け入れろ

ルール2 彼らに直接触れてはならない

ルール3 友達の友達是我ら。それが干渉限界

ルール4 《企業》の意向は何よりも優先される

ルール5 《スタッフ》は個人の思想を持ち込むな

ルール6 情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である

ルール7 我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない

ルール8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては《企業》の利益のために

ルール9 性質上、《学園》の《保守》は最大の命題である

追加ルール 今年の生徒会には気をつけろ

第一話 登場する生徒会（前書き）

お久しぶりです。今は受験期間なので一息です。次の更新は以前書いたように三月九日以降になります。

第一話 登場する生徒会

キンコンカンコン……

授業終了のチャイムが鳴り、教室からたくさんの生徒が出ていく。家が近い友人や恋人とそのまま帰宅するもの、仲間たちと共に部活動へと参加するもの、とそれは様々だ。

そんな生徒達を横目で眺めつつ、俺……紅葉^{あかば} 蓮^{れん}は帰り支度を整えていた。

別に帰るわけではない。俺が放課後に行く場所は生徒会室。そう、俺は碧陽学園生徒会なのだ！

……コホン。

鞆を持ち、席を立つ。

それと同時に隣に座っていた女子生徒も立ち上がった。

「蓮、もう生徒会室に行くの？」

この少女は紅葉 知弦。俺の双子の姉なのだが、本当は血がつながっていないんじゃないかと思うくらい美人である。腰まで伸ばした黒曜石のような輝きを放つ漆黒の髪。出るところ出て締まるところ締まったパーフェクトボディ。

全てを見通すかのような切れ長の瞳。

………その一つ一つが大人の魅力を醸し出している。クールビユーティという奴だ。

俺は首を横に振り、否定の意を示す。

「いや、真冬たちを迎えに行ってから行くよ。姉さんは？」

「んー、私は先に行くわ。急がないとキー君がアカちゃんを毒牙にかけてしまうかもしれないから」

「……………」

ライオンがガゼルを見つけたかのように舌舐めずりをする姉さん。いつものことだがなかなか慣れるものではない。

「じゃ、また生徒会室で」

「ええ、早く来なさいよ？」

子供に言い聞かせる母親のごとく腰に手を当てて言う姉さんに、俺は片手を上げ、教室を出て行った。

一年生の教室がある階へと続く階段の下に彼女達はいた。

「あ！ やつと来たー♪ 遅いですよ、蓮先輩」

両拳を顔の下に当て、むーと頬を膨らませているこの少女は椎名真冬。三年前のとある事件で知り合い、それから親しくしている。白磁のような白い肌と色素の薄い髪のせいで、思わず守ってあげた

くなるような容姿をしているが、芯は強くしつかりとした美少女だ。

「今日は珍しく遅かったなー。またいろいろと巻き込まれたのか？」

太陽のような明るい笑みを浮かべているのは椎名 深夏。真冬の
一つ上の姉で、若干シスコン気味な活発少女だ。

長髪を左右で留めたツインテールが深夏の動きに合わせてピョコピ
ョコ跳ねている。

俺は二人の反応に苦笑いを浮かべた。

「遅いぞーって……いつもとあんまり変わらないじゃないか」

「なに言ってるんですか！ いつもより十五秒も遅刻しているんで
すよ！？」

「十五秒ぐらい大目に見ようよ！」

「駄目です。はぁ、先輩は女心が分かってませんねえ。そんなんだ
から【彼女いない歴】 〓 【年齢】 なんですよ」

「ぐう……」

「言い負けたときにぐうの音を出した奴なんて初めて見たぞ……」

「う、うるさいやい！ 今に見てろよ……絶対かわいい彼女を作っ
てやるんだからな！！」

そうさ！ 高校生活も今年で終わりなんだから、いい加減彼女を
作ってやるんだ！

「……やっぱり女心が分かってないじゃないですか……」

「ん？ なんか言った？」

「なんでもありません……はぁ」

肩を落とし、溜息をつく真冬。

なんだ？ 俺なんか悪いことしたか？

「ほらほら、さっさと生徒会室に行こうぜー」

「わっ」

「きゃっ」

と、場の空気を変えるためか深夏は俺と真冬の手をとって歩き始めた。

「ちよっ、危ないって！」

「大丈夫だって、ほらほらスピード上げるぜー！」

「お姉ちゃん！ 本当に危ないからあっ！」

「iiiiiiiiiiっやっほうううっ！！」

「聞いちゃいねえ……」

とりあえず深夏に感謝だ。真冬が落ち込んだ原因は分からずじまいだったが、おそらく俺に非があったのだろう。

「……………女心、か」

俺たちはそのまま生徒会室に向かった。

第一話 登場する生徒会（後書き）

感想、お待ちしております。

第二話 駄弁る生徒会？（前書き）

あれ？ 書く暇がある？
受験生のはずなのにな……。。

それではやっ和本編です。

第二話 駄弁る生徒会？

「おっくれましたー」

「す、すいません」

「ちーっす」

それぞれの挨拶で入っていく俺達。

目の前には先に来ていた姉さんの他に、二人の生徒がいた。

机に体を伸ばし、夢中でスナック菓子食べているロリっ娘……

桜野 くりむは、この生徒会の会長で俺と姉さんのクラスメイトでもある。

赤みのかった髪にアクセント代わりだろうか、赤い紐リボンをつけている。

勿論、この生徒会に入っていることから分かる通り、当然美少女。マスコットのような可愛さと背伸びした発言が、これまた萌えを誘う反則美少女なのだ。

そして、桜野の隣で今来た椎名姉妹を必死に口説いているのが、杉崎 鍵。

生徒会で俺以外の唯一の男子で二年生。サラッとした茶髪と整った顔立ちが、俺とは違い腹立たしい。

しかも「美少女ハーレムを作る」とかいふ男達の望みを信念に掲げているが、姉さんと真冬に手を出そうとした時は俺が全力で阻止させてもらっている。

勘違いされる前に一応言っておくが、俺はシスコンではない。姉さんが誰と恋愛しようが俺には関係ないが、仮にも俺の義兄になる奴なんだ。俺の妨害を乗り越えられる男じゃないと困る。

俺達が定位置につくと、杉崎が話しかけてきた。

「そうそう、深夏と真冬ちゃん、それに蓮さんは『初めての時はあんなに面白かったのに』みたいなことって、なんかあります？」

「なんだよ、やぶからぼうに」

隣の深夏が不審そうに杉崎を見ている。

「いやさ。会長が、世間がつまらなくなっただんじゃなくて、自分がつまらなくなっただ、なんて久々にいいことを言うものだからさ」
「久々とは失礼なっ！」

机をバンと叩いて上目線で怒る桜野はなんだかとてもかわいい
(小動物的な意味で)。

「ん？ なによ蓮。私の方をジロジロ見て。顔になんか付いてる？」
「いや、別に大したことじゃないんだ。気にしないでくれ」
「？ ま、まあ構わないけど」

ほわぁ……和むなー……。

「————っ!？」

そう思っていた瞬間、俺の足に走る鈍い痛み。

慌てて原因を確かめると、俺の靴の上から真冬が自分の厚底ブーツでつま先をグリグリと踏んでいた。

(ま、真冬！ 急にどうしたのさ？ 俺なんかした？ ってか、足が千切れそうなくらいに痛いから、そのブーツどけてくれると嬉しい

いんだけど……)

(うるさいです。会長さんの方を見てニヤニヤしている先輩が悪いんです)

(えー……ちょっと、それぐらいで怒らなくても……)

(あんなロリィな少女に欲情するなんて……キモチワルイです)

(……はあ)

真冬に小声で反論してみたものの、結果は惨敗。

もう俺は抵抗を諦めて、真冬の攻撃を素直に受けることにした。

「真冬ちゃんはなんかある？」

「うーん、そうですねえ……」

真冬は腕を組んで考え込んでいた。俺の足をグリグリ踏むことと同時に。

そして、思いついたのか、答えを返した。

「真冬はお化粧……コスメですかね」

「化粧？」

「はい。子供の頃は母親がしているのを見て、すごくしたくてしたくて仕方なかったんです。それで、中学生の頃、初めて自分のコスメを買ったときは嬉しくてたまらなかったんですけど……。よく考えると真冬、あまり自分を着飾るのって好きじゃなかったみたいで。最近だと、最低限のことしかしたくないといいますか……」

化粧ねえ……真冬には必要ないんじゃないか？ 逆に。

杉崎も同じ考えに行き着いたようで、「なるほどねえ」と頷いていた。

「ああ、なるほどねえ。真冬ちゃんらしいなあ。でも大丈夫だよ、

真冬ちゃん！ 真冬ちゃんは、化粧なんかしなくても充分可愛いから！ むしろ、真冬ちゃんの本来の美貌を隠してしまう化粧なんて無い方が痛い痛い痛いっ！ ちょっ、蓮さんどうしたんすかっ！ 急に後ろからヘッドロックするなんて！」

「いや、途中までは俺も杉崎に同意してたんだが……そろそろ止めておかないとお前、真冬を口説いてただろ？」

「当たり前じゃないっすか！ 見て下さいよこの四人を！ ハーレム万歳。せっかく頑張って生徒会入ったんだから、全員の心を手に入れないでどうするんですかっ！」

両手を広げ、声高々に言う杉崎。

そんな杉崎に、姉さんは「そういえば」と返す。

「キー君と蓮は《優良枠》で入ってきたんだっけ。……二人ともそうは見えないのに」

「だよなー。コイツ、どう見てもただの色ボケ男だよなー」

「蓮も実際はただのオタクだもんね」

深夏と桜野が同意し、真冬は苦笑していた。

俺達が反論しようとする、桜野がバンっと机に手を置く。

「散々言ってきたことだけれど、やっぱりこの学校の生徒会役員選抜基準はおかしいわよっ！ 人気投票からしておかしいけど、《優良枠》にしても、成績だけじゃなくてメンタル面まで評価に加えるべきだわっ！」

桜野が何度目か分からない文句を言う。それに杉崎はお決まりの反論を展開した。

「俺はこのシステム、最高だと思いますけどね」

この学校の生徒会役員選抜はとても変わっている。

まず基本的には生徒による《人気投票》で生徒会メンバーを決める。ただしこれは、ほぼ必ずと言っていいほど容姿……つまり美少女に決まってしまう。美男子ってのは、往々にして男子から反感を買うので、選ばれることはまずない。やはり可愛いのは正義である。

しかもこのシステム、実は結構理にかなっている。

いくら容姿で選ばれたとはいえ、選挙活動も何もないため、生徒達は純粹に日々の生活から、憧れの人を自分で決めて投票するのだ。ちなみに俺は紙をパクって、四人全員に投票した。一応、友人だからね。

で、そうになると、その「憧れの生徒会」が上に立っていれば、案外皆生徒会の言う事をちゃんと聞く。

ぶっちゃけ生徒会の仕事なんて誰がやっても変わりやしないので、カリスマ性さえあれば問題ナッシングだ。

結果、生徒会は美少女の集まる場となるわけで。

しかし、やはり妥協点はある。

それが《優良枠》。

各学年の成績優秀者……年度末の試験のトップ成績者は、本人が希望すれば、生徒会に入ることができるようになっている。

しかし、成績トップの奴なんかは、勉強一筋なので、希望なぞ出す奴はいない。

だがそこに、年度末でトップを取って希望を出したのが……この俺、紅葉 蓮と杉崎 鍵というわけだ。

理由は簡単。それは……。

「しかし、二人ともよくやるよなあ。そのパワーは尋常じゃねえぞ」

深夏が呆れた視線で俺達を交互に見る。桜野も「まったくだよ」

と嘆息していた。

『俺は《自分以外全員美少女のコミュニティ》に入るためならなんだってする（します）よ。ええ。年度始め（入学当初）ほとんど最下位の成績でも、一年でトップに上り詰めるぐらい、朝飯前だ（ですよ）』

と、いうわけだ。

「でも、二人がその努力をしてしまったから、お互いに男子が一人入っちゃったのよね」

『それは禁句です』

ボソツと呟く姉さんに、二人でツツコミを入れる。

そうなのだ。俺と杉崎、二人して頑張ってしまった結果、当初の目的である《自分以外全員美少女》という条件が崩壊してしまったのである。偶然とはげに恐ろしきものかな。

そしてしばらくは何気ない雑談が続いたのだが……割愛させてもらおう。

第二話 駄弁る生徒会？（後書き）

「駄弁る生徒会」は次回まで続きます。

感想、待ってまゝです。

第二話 駄弁る生徒会？（前書き）

祝！『生徒会の水際』発売！！

みなさん、是非感想を！

それではどうぞ。

第二話 駄弁る生徒会？

桜野に鋭い目で睨まれた杉崎が、しれっと話題を変更する。

「でも、俺が一番恐怖するのは、最初に言っただ通りのことなんですけどねー」

「？ なに？ どういうこと？」

桜野が首を傾げる。

俺は、なんとなくではあるが、杉崎の言いたいことを理解できたので、セリフを続けさせてもらった。

「つまらない人間になる。つまり、恵まれた環境にいても、それを恵まれているとは感じられなくなることで、とでも言うか？ ようするに、このみんなで楽しく過ごしている日常を、いつか当たり前と感じるようになったらもうんじゃないか、ってことだろ？」 杉崎

「はい、蓮さんの言うとおりです。俺はこのハーレム状況が楽しくて仕方ないっすから、そうなってしまったらと思うと、なんか……」

「あー。まあ、分からないじゃないかな、それは」

桜野は珍しく俺達の意見に同意してきた。そうして、嘆息する。

「そういうのは、気をつけてどうこうなるもんじゃないからね。生活ランクと同じよ。一度裕福な生活をした人間は、たとえ収入が落ちても、今の生活基準をなかなか下げられないのと一緒にで」

「また、えらく美少女ロリ学生らしくない例を出してきましたね」

「確か、桜野んとこって経営者だったよな？ だからか？」

「そうそう。良くも悪くも浮き沈みが激しい収入なのよね」

「はあ……」とため息をつく桜野。低収入時代でも思い出していたのだろうか。

なんか妙にしんみりとした空気になってしまったので、俺は杉崎とアイコンタクトをとると、桜野を弄って空気を明るくすることにした。

「なるほど。それで会長は、美少年を金ではべらす趣味が未だにやめられないと……」

「杉崎と一緒にしないでよっ！　なにその趣味！　私悪女じゃない！」

「なんだ、じゃあこの前俺を家に呼んだのもそういうことだったのか？」

「ばっ！？　なに言ってんのよ、蓮！　あれは単に久しぶりに昔の話でもしようってただだったでしょ！？　か、勘違いされるようなこと言わないでよっ！」

「貧乏な今は、唯一、家に侵入してくるアリの手足をもぐことだけが生き甲斐……と」

「もうただの根暗女じゃない私！　お金とかそういう問題じゃないじゃない！」

「なんだ、じゃあこの前俺の家に来たのはウチの猫をいじめるためだったのか？」

「あんたはさっきから何が言いたいのよ！？　それはただ知弦と遊ぶためだったでしょうが！」

桜野が全力で叫んで疲れている。……こんなに弄り甲斐のある奴も珍しい。

しかし、確かに、一度上のランクに至ると、そうそう自分から下には戻れない。つまりはそれが、つまらない人間になるということなのだろう。

「ま、一部の人間……俗に言う勝ち組の人達は、どんどん上に行き続けるけどね」

姉さんが最後にまとめる。

「そこそこ幸せに……ねえ」

杉崎がポツリと呟く。

俺も、なんだかんだ言っただけで、結局は一般の中に埋没するのだろう。……姉さんみたいに何か才能があるわけでもないのだから。

「……駄目だな」
『え?』

突然の杉崎の呟きに、俺を含める全員がそちらを見る。

杉崎はその視線を一身に受け……そして、立ち上がった!

「俺は、美少女ハーレムを作る!」

高らかに宣言した!

「や、海賊王になるみたいなのりで言われてもな……」

「妥協するにしても、俺は高いところで妥協してやる! 美少女をはべらせて、いつか『あー、美少女にも飽きたな』って言えるところまで上ってから、妥協してやる!」

「……なるほど、とりあえず行くところまで行ってみようってわけか」

「……いいんじゃないかしら。私は好きよ、そういう考え方」

俺の言葉に姉さんが続く。相変わらず、狙わないところで評価受

ける奴だな、杉崎は。

深夏もまた「まあ、ハーレム云々はさておき、そのスタンスは悪くないな」と笑っている。

真冬は「そうですね……今から悩んでるより、とりあえずは上にいってみるのが、いいかもしれませんね」とやんわり微笑んでいた。

で、桜野といえば……。

「えー、あんまり頑張るのは疲れるよう」

駄目人間だった。

割と既に早い段階で妥協していた。

そういやこいつはこういう奴だったな……。ま、いっか。幸せならそれでいいと思う。

桜野は菓子（姉さんのだろ……？）を食べ終わると、けぷっと可愛らしくゲップをして満足そうに宣言した。

「というわけで、今日は解散しますかあ」

『……………』

全員が、桜野を駄目人間だと思った。

ま、俺達も結局解散しちゃうんだけどな、それで。

杉崎と顔を見合わせ、静かに頷く。

……さて、そろそろ俺達は仕事を始めるとしますか。

第二話 駄弁る生徒会？（後書き）

あれ？ まさかの次回まで続くパターン……？

感想、お待ちしております。

主人公設定（前書き）

主人公のプロフィールです。
参考程度に見てくれればいいかと。

主人公設定

名前…紅葉あかば蓮れん

年齢…十七歳

学年組…私立碧陽学園第三学年A組

役職…碧陽学園生徒会書記

身長…170cm（見た目的には杉崎より少し低いくらい）

体重…60kg

外見…そこまでではないが少し痩せ形

知弦と同じ漆黒の髪で少し長め

顔は中の上といったところ。格好良いわけではないが、普通よりは良い

趣味…アニメ観賞、読書、執筆作業、イラスト描写などのいわゆるオタク趣味

演劇

誕生日…11月22日

血液型…AB型

備考…紅葉 知弦の双子の弟

同じクラスの親友である瀬川せがわ俊哉としやと共に「碧陽のオタクコ

ンビ」と呼ばれている

中学のときに椎名姉妹、桜野くりむ、宮代奏、栗落花 杏子
と知り合っている

高校二年のときに杉崎 鍵と一騒動起こしている

椎名 真冬、宮代 奏、栗落花 杏子に好意を寄せられてい
る

主人公設定（後書き）

若干ネタバレ入ってます（汗）

第二話 駄弁る生徒会？（前書き）

お久しぶりです。

公立入試が終わりましたので更新再開です。

第二話 駄弁る生徒会？

「……で、杉崎と蓮はまた生徒会室に残ってるんだ」

くりむは校門前で再び出会った生徒会メンバー達に向かって苦笑した。

彼女達もどこか優しげな顔をしながら微笑んでる。

「それにしても……鍵はともかく、なんで蓮さんまで雑務してんだ？ 別にハーレムなんて狙ってねえだろ、あの人は」

深夏が肩をこきこき鳴らしながら言う。

杉崎は美少女と話す時間を作るために、皆が帰った後で雑務をこなしている。が、蓮は違う。

知弦がそれに答えた。

「蓮は……元々あいう人なのよ。今だって、キー君が大変だろうから手伝っているだけ。特にこれといって考えているわけではないわ」

「そうね。確かに私が蓮と初めて会った時もそんなことを言ってたわ。『俺は、他人の為にできることをしたいんだ』って」

そして、くりむが言葉を引き取った。彼女と蓮には少なからず関係があるようだ。

「ま、真冬は、先輩達のこと、好きですよ？」

「そんなこと分かってるわよ。この学園で、あの二人のことを心から嫌ってる奴なんていやしないわ」

真冬の呟きにくりむが微笑む。

「あら、アカちゃん。もしかして意外と二人の事が好きだったり……」

「な、なに言ってるのよ！　そういう感情じゃないってば！　……まあ、蓮に関しては、昔少しばかり世話になったから、そういう親友的な感情はあるわね」

「じゃあ鍵のことも別に嫌いではないと？」

「だからそう言ってるでしょ？ …… ったく、自分で言ってたけど、杉崎はまるで学園ドラマものの先生役よね」

「違うのは、問題を解決しようと出張ってくるんじゃないくて、ただ安息の場所を与えてくれるだけつつうとこただけだな」

「ま、真冬はでもすごく感謝しています」

真冬の言葉に、全員で苦笑する。それは、全員がそうだから。なんだかんだ言って、ほぼ毎日生徒会室に顔を出してしまうのは、杉崎鍵がいて、紅葉蓮がいて、そこに楽しい空間が形成されるからだ。った。

くりむは「さて」と仕切る。

「さっさと帰るとしましょう！」

「そうですね。先輩達の気持ちを無駄にしないためにも、ですね」

くりむはそれを区切りに「じゃあまた明日ねっ」と駆けだす。メンバー達も、別れの挨拶と共にそれぞれの帰路についた。

夕暮れの中、くりむはふと、二人と自分達のことを思い浮かべて呟いた。

「つまり人間も、悪くはないのかもね……。さて、今夜は久し振りに親友と電話で昔話でもするとしますかっ」

日常をつまらないと思う人間が集まると、もしかしたら、逆にとても楽しいことが発生するのかもしれない。

私立碧陽学園生徒会。

そこでは毎日つまらない人間達が楽しい会話を繰り広げている。

第二話 駄弁る生徒会？（後書き）

駄弁る生徒会、終了です！

次回はなんと……ラジオです！

それではまた次回〜♪

感想お待ちしています！

第三話 放送する生徒会？（前書き）

東北での地震による犠牲者に心からご冥福をお祈りいたします。

それでは第三話です。

第三話 放送する生徒会？

「他人との触れ合いやぶつかり合いがあってこそ、人は成長していくのよ！」

桜野がいつものように小さな胸を張って何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

『……………は？』

よく意味が分からない。それは杉崎も同じだったようで、どういう意味かを聞き返していた。すると桜野は、ホワイトボードにキュッキュツと議題を記し、「これよ！」と、バンツとボードを叩いた。

「ええと…………ラジオ放送？」

ホワイトボードにはクツキリとそう記されていたが…………しかしやはり意味が分からなかったため、首を傾げる。見れば、姉さんを始め、他の皆も同様に首を傾げていた。

桜野は一人、胸を張ったままで続ける。

「そう！　これから生徒会でラジオをやろうと思うの！」

「ら、ラジオって…………」

気弱で引っ込み思案の真冬が、何か嫌な予感でもしたのか、少し怯えながら訊ねる。

「あの…………ラジオですか？　音楽かけたり喋ったりする…………」

「そうよ。その、ラジオ」

「おい待てコラ。それって生徒会の仕事か？　普通は放送部の役目だろ」

おそらく生徒会全員（一人除く）が思っていることではあるが。しかし……ただ一人、そういう常識のない人間が、ここにはいたようだ。

「何言ってるのよ、蓮！　生徒会っていうのは生徒をまとめる立場にある組織よ！　政見放送みたいなものもたまにはしないといけないいわ！」

「政見放送なんて言葉よく知ってたわね、アカちゃん。よしよし、いい子いい子」

姉さんが、子供をあやそうように桜野の頭を撫でていた。願わくばそのままこの提案をあやふやにしてほしいのだが……。

桜野は一瞬気持ちよさそうに目を細めたものの、ハッと我を取り戻すと「うがー！」と姉さんの手を払いのけた。

「政見放送ぐらい知ってるよ！　子ども扱いしないで！」

「そうね。アカちゃん、ごめんなさいね」

「わ、分かればいいのよ」

そう言う桜野に、杉崎がボソツと呟く。

「そういえば……昨日、高視聴率クイズ番組で『政見放送』をテーマに問題が出てましたけど……。いえ、なんでもないです」

「……。……と、とにかく！　政見放送よ！」

「おいっ！　思いっきり触発されてんじゃねえか！」

こいつは思い付き以外で行動できないのか……？

しかし、桜野は言い出したら止まらない。俺の隣で、深夏が嘆息交じりに発言した。

「まあ、文句言ってもどうせやるんだろうけどよ……。でも、なんでラジオなんだ？ 映像のほうがいいんじゃないの？」

「それも考えたけど……放送部に押しかけたら、『今渡せる機材はこれしか……』と泣かれたから、ラジオなの」

放送部はどうやら権力に負けたらしい。

配線関係は水面下でとくに終わっていたようで、桜野は俺たちの前にそれぞれ一つずつマイクスタンドを設置した。……可哀想に、放送部。

「か、完全に準備されちゃってます……」

真冬が元気をなくしていた。まあ……もともとこういう「目立つこと」が苦手なタイプの子だ。ご愁傷様である。

杉崎と姉さんは、やるからには手を抜かない構えのようで、「コホン」と咳払いをして、のどの調子確かめていた。

深夏は特に緊張することもなく、腕を組んでふんぞり返っている。

「さあ、始めるわよ！」

桜野が声を上げ、手元に据えられたボタンを押す。

……さて、仕方ない。やるからには俺もしっかり取り組むとしますか。

第三話 放送する生徒会？（後書き）

チャット友が宮城にいるんですよ……。
大丈夫かな？

感想お待ちしています。

第三話 放送する生徒会？（前書き）

しばらくはラジオが続きます。

高校からこんなに宿題が出されるなんて……！

最後にアンケートのお知らせがあります。

第三話 放送する生徒会？

ON AIR

桜野「桜野くりむの！ オールナイト全時空！」

杉崎「放送範囲でけえ！」

蓮「時空まで超えた！？」

♪ オープニングBGM（ご自分でアニメ『生徒会の一存』のOPをお聴き下さい）♪

桜野「さあ、始めました。桜野くりむのオールナイト全時空」

知弦「夜じゃないけどね」

桜野「この番組は、富士見書房の一家提供でお送りいたします」

深夏「どうしたんだ、富士見書房……。無駄な投資も甚だしいな、

おい……」

桜野「まあ、ギャラもゼロ円だし、機材も放送枠にもお金かかってないから、スポンサーにしてもらうことは何もないんだけどね」

真冬「じゃあなんで提供読んだんですか……」

桜野「それっぽいじゃない。うん、今のところとてもラジオっぽいわ」

真冬「……はあ。いいですけど」

桜野「こら、真冬ちゃん！ そんなテンションじゃ駄目よ！ リスナーは、もつと、こう、女の子の元気な会話を望んでいるんだから！」

蓮「いや、決めつけんなよ」

真冬「そ、そうでしょうか……」

桜野「うん、リスナーなんてそんなもんだよ」

杉崎「こらこらこらこら！　なんでリスナーを見下げた発言すんのか！？」

蓮「ってか、生徒に喧嘩売ってんだろ、コイツ」

桜野「パーソナリティあつてのリスナーじゃない」

杉崎&蓮『リスナーあつてのパーソナリティだ！』

深夏「おお、男子二人が物凄く真つ当な発言してる！　すげえ！　ラジオ効果すげえ！」

桜野「そうね。私が間違ってたわ、二人共」

杉崎「わ、分かればいいですよ。分かれば……」

桜野「そうよね。やっぱりある程度媚びておいた方が得よね。うん、私、大人」

蓮「だから、そういう発言をしたらダメだって————」

桜野「お便りのコーナー！」

蓮「ラジオなのに会話のキャッチボール無視かつ！」

杉崎「せめてもう少しラジオっぽくしましょうよ！」

知弦「それがアカちゃんクオリティ」

蓮「なんで姉さんは要所要所でしか喋らないの！？　もっと舵取りしてよ！」

知弦「……………」

杉崎「ラジオで無言はやめましょうよ！」

桜野「さて、一通目のお便り」

蓮「進行重視かつ！　会話の流れ無視なのかっ！？」

桜野「『生徒会の皆さん、こんばっばー！』はい、こんばっばー！」

杉崎「え？　なにこの恥ずかしい挨拶！　恒例なの！？」

女性陣『こんばっばー！』

杉崎&蓮『俺たち以外の共通認識！？』

桜野「『オールナイト全時空、いつも楽しく聴いております』ありがとうございます！」

蓮「嘘だ！ 第一回放送のはずだ、これは！」

桜野「時系列なんて瑣末な問題よ、蓮。このラジオにおいてはね」

杉崎「さすが『全時空』！」

桜野「あと、言い忘れてたけど、一応、生でも放送されてるわよ、これ。聴いている人は少ないだろうから、また明日、昼休みに校内で流すけど」

杉崎「どおりでメールが来るはずだ！ っていうか、じゃあもっと発言に気を付けてください！」

桜野「はいはい。じゃ、メールの続きね」

蓮「あっさり流した！？」

桜野「『ところで皆さんに質問なのですが、皆さんは、どんな告白をされたら嬉しいですか？ 僕は今、恋をしているのですが、どう告白しようか迷っています。くりねえ、是非アドバイスお願いします』」

蓮「『くりねえ』って呼ばれてんのか！？ こんなにロリのくせに！」

桜野「そうねえ……。これは難しい問題ね。でも、恋愛経験豊富な私に言わせれば————」

杉崎「男と手繋いだことさえなくせに……」

桜野「失礼なっ！ これでも同年代の男性に抱き締められたこともあるのよ！」

杉崎「なっ！？ か、会長がもう汚されていたなんて……そんな……」

蓮「汚してねえよ！ 桜野を慰めていただけだ！」

深夏「え？ まさか……その男って……蓮さん？」

杉崎&知弦&真冬『なんですとっ！？』

蓮「怖いよ！ なんでそんな目で睨まれるんだよ！」

杉崎「よくも会長を……！」

知弦「蓮、あなたアカちゃんまで……」

真冬「……………（じー）」

蓮「今俺すげえアウエーだな！……さ、桜野。コーナーを続けてくれ」

桜野「あー、はい。さっきの答えだけど……普通に告白すればいいと思う」

杉崎「なんかテキトーなアドバイスした————！！」

桜野「知弦はどう思う？」

知弦「そうね……好きにすればいいんじゃないかしら。私には関係ないし」

蓮「パーソナリティがリスナーに冷てえ————！！」

ちよっ、姉さん！？ もっとマジメに答えてやりなよ！

桜野「真冬ちゃんはどう思う？」

真冬「え？　そうですね……。えと……真冬は……。……分かりません」

杉崎「まさかの『分かりません』発言キタ————！！」

桜野「深夏は？」

深夏「当たって砕けろ！　以上！」

杉崎「もっとリスナーのハートを丁重に扱おうよ！」

蓮「つてか、砕けちゃダメだろ」

桜野「次のお便り。『妹は預かった。返してほしくば指定口座に———』……ん？　あれ？　これ、間違いメールね。ちよっとス

タッフー、しっかりしてよおー。まったく。……じゃ、次」

杉崎「スルーしていいの！？　今の内容、そんな簡単にスルーしていいの！？」

蓮「スタッフって誰……？」

桜野「『生徒会の皆さん、こんばんぱー！』こんばんぱー！」

女性陣「『こんばんぱー！』」

杉崎「だからなんでみんなこれだけノるの！？　いつ打ち合わせしたの！？」

蓮「恐るべきチームワークだな……」

桜野「『くりねえ、どうしよう。私、早急にお金が必要で……。と

第三話 放送する生徒会？（後書き）

蓮と杉崎がツツコミに回る話ですね。

自分的には杉崎はボケよりツツコミの方が輝いているような気がします。皆さんはどうでしょうか？

さて、ここで募集のお知らせです。

この小説において番外編およびオリジナルの話を書こうと思っています。

なので、「書いてほしい」「読みたい」という話を感じに簡単にタイトルと内容を書いて送ってください。

内容は原作の番外編でも構いませんし、全くのオリジナルでも構いません。

ついでに、その話で登場させてみたいオリジナルキャラを思いついた人は、書いてくれても構いません。もちろん登場させます。作者が気に入ったら、本編に登場する機会があるかもです。男でも女でも構いませんよー。

基本的に全部書かせてもらうつもりですが、時間の関係上、書ききれないかもしれませんので、そのところはあしからず。

作者が気に入った話から書いていきます。

書いたらちょこちょこ掲載していこうと思いますので応募よろしく願います。

締め切りは三月いっぱいとさせていただきます。

たくさんのご応募よろしく願います。

第三話 放送する生徒会？（前書き）

あれ？ アンケートが全然来ない……？

みなさんもしかして希望の話とかないんすかね？

と、とりあえず、アンケート及び感想お待ちしています。

第三話 放送する生徒会？

蓮「ひ、ひどい歌詞だ……」

桜野「さて、聴いていただきましたのは、絶賛発売中のシングル《妹はもう帰ってこない》でした。デビューシングルの《弟は白骨化していた》も合わせてよろしくねー！」

杉崎「アンタの過去に一体何があったんだ！」

桜野「じゃあ、ここで恒例のコーナー。《椎名姉妹の、姉妹でユリユリ♪》」

杉崎「……。……。それはちよつと聴きたいかも」

真冬「先輩！？ ちゃんとそこはツツコンでくださいよ！」

蓮「あー、やべ。なんか鼻血出てきたわ。……。姉さん、ティッシュ持ってない？」

知弦「ええ、あるわよ。……。はい、じゃあ、やってあげるから上向いて」

蓮「うん……。ありがと。知弦姉さん」

深夏「おいコラ。イチヤイチヤしてねえで助けろよ」

桜野「このコーナーは、リスナーから送られてきた恥ずかしい百合っぽい脚本を、椎名姉妹が演じるという、人気コーナーです」

杉崎「人気って設定なんすか……」

桜野「ほら、ご機嫌取りよ、ご機嫌取り。私はあまり好きじゃないけど、これやっておけば、とりあえず生徒は満足だろうから」

杉崎「だからそういう発言は本番中にしないでください！」

桜野「じゃ、椎名姉妹、よろしくー。はい、これ、台本」

真冬「う、うう……。ホントにやるんですかあ？ ……蓮せんぱあい」

蓮「ま、まあ、そこまで気負う必要はないんじゃないか？ ほ、ほら、姉弟でなんて、あんまり珍しいモンでもないしさ。……。ね？」

姉さん」

知弦「蓮。それ以上は確実にドツボるから黙っておきなさい」

深夏「うわ、なんだこれ！　こんなの読んでられつかよ！」

桜野「こら深夏！　逃げないで！　これを持ち越えてこそ、ホンモノの副会長よ！」

杉崎「副会長の資格とまるで関係ないでしょう……」

深夏「……やるしかないようだな」

杉崎「なんで納得してんの！？」

真冬「真冬も……覚悟を決めました」

杉崎「なにキツカケで！？」

桜野「それじゃ、いつてみよー」

♪ 耽美なBGM ♪

『真冬……。あたし、もう……』

『ああ、おねえちゃん……。んっ！　あ、はあはあ』

『真冬……可愛いよ、真冬……』

『おねえ……。ちゃ……。……んんっ！』

杉崎「待て待て待て待て！　個人的にはドキドキワクワクだけど、これは校内放送でやっていいレベルじゃないでしょう！？」

桜野「う、うん……。そ、そうね。こ、これは、なんか、やりすぎたわ」

深夏「ひでえ！　そういう反応されると、あたし達本格的にいたたまれねーじゃねえか！」

知弦「……椎名姉妹の絡みは、放送コードに引っかかるわね。そういうデイープなのは、プライベートだけで留めてくれるかしら」

深夏「勘違いされるようなこと言うなよ！　プライベートはこんなんじゃねー！」

真冬「そ、そうです！　……れ、蓮先輩は信じませんよねっ、こんななの！」

蓮「……………（ピクピク）」

真冬「ファンレターというよりラブレターじゃないですかっ！ 誰ですか！ 蓮先輩にちよっかいかけようとしている女狐は！ いい度胸です。今すぐお姉ちゃんに相手して————きゅんっ！」

深夏「真冬、少し落ち着け」

蓮「大事な話って……また演技の指導かな？」

知弦「あなたの鈍感さもナカナカのものね」

桜野「さて、次は匿名希望さんからのお便り。こほん。『桜野くりむ様。貴女の可愛らしさを見る度に、僕の心はいつもドキドキときめいて————』」

杉崎「またラブレターかっ！ くそっ、誰だ！ 俺の女にちよっかいかける奴は！ いい度胸だ！ 出て来い！ 俺が相手して————げふっ」

桜野「な、なにを口走っているのよ、貴方は！」

杉崎「だ、だって、俺の彼女にラブレターなんて送る奴がいるから……」

桜野「私は杉崎の彼女じゃないよ！ ラジオ放送で変なこと言わないの！」

杉崎「すいません。カッとなってやりました。反省はしていません」

桜野「なんでそんなにふてぶてしいの！？」

杉崎「うう……。で、でも、その、勘弁してください。その会長への手紙コーナーは、俺が嫉妬に狂ってしまって、耐えられません」

桜野「う……」

蓮「………どうでもいいけど、イチヤついてねえで、早く進めろよ」

桜野「い、イチヤついてなんかないわよ！ 蓮まで変なこと言わないで！ も、もう……調子狂うわね。こほん。……じゃあ、次のコーナー……」

深夏「あ、なんだかんだ言って、鍵の希望通り、手紙読むのやめるんだな」

桜野「う……。と、とにかく、次！ 《学園五・七・五》」

第三話 放送する生徒会？（後書き）

前書きでも書きましたが……前話で開始したアンケート。是非送ってくれるとありがたいです。今後の参考にもなるので。感想共々お待ちしております。

第三話 放送する生徒会？（前書き）

この頃、古株の方々の小説が中々更新されませんね……。自分としては、残念な限りです。皆さん、頑張ってください。

第三話 放送する生徒会？

杉崎「……なんか、急に、普通の定番コーナーですね」

桜野「うん、ネタ切れだからね」

蓮「言っちゃうんだ！」

桜野「このコーナーは、リスナーが考えた、この学園にまつわる面白おかしい五・七・五を紹介するコーナーです」

知弦「逆に危機感を抱くほど、ありきたりなコーナーね」

桜野「こほん。では、いきましよう。匿名希望さんからの五・七・五」

『紅葉蓮 メラメラ燃えろ 杉崎と』

桜野「……素晴らしい歌ですね。情景が目には浮かぶようです」

杉崎&蓮「……………」

桜野「えっと……二人共？ 私が言うのもなんだけど……ツツコマないの？」

杉崎「いえ……。……………。すみません」

蓮「リアルに身の危険を感じて、テンションが上がりにくいんだ……」

桜野「あー……」

深夏「……ちよつと、笑いのレベルを超えていたよな、今のは……」

真冬「真冬も、若干引いてしまいました」

知弦「まあ、でも、そうよね。キー君も蓮も、そういう立場よね、基本。皆の憧れの美少女達が集まるコミュニティに在籍しているってだけでもアレなのに。その上、自分から『攻略する』だの『ハーレム』だの『嫁に迎える』だの宣言しているんだから……自業自得？」

杉崎「う、うう……。え、ええい！ 構うものか！ ここは俺のハ

ーレムだ！ 文句あるやつ、喧嘩なら買うぜ！ だから——」
蓮「そうさ！ 杉崎の言うとおりでとも！ 悪口なら真っ向から受け止めてやる！ だから——」

桜野「だから？」

杉崎&蓮『火、つけるのだけは勘弁してください。すみませんでした』

桜野「……男二人がラジオなのに号泣しながら土下座したところで、次のお便りいこうか。これも……えっと、匿名希望みたい。こほん」

『金がない 勢い余って 人さらい』

杉崎&蓮『犯人コイツかあ————！』

桜野「え？ なに？ どういうこと？」

杉崎「いや、だから、さっきの誘拐事件の——」

蓮「そ、そんなことより、コイツの名前と住所！ 書いてねえのか！」

桜野「それはないけど……追伸で『二万円も要求してやったぜ！』とは書いてあるわ」

杉崎「安いな、うちの生徒の身代金！ なんで両親用意できねーんだよ！」

桜野「私に言われても……。杉崎。世の中には、恵まれない人もたくさんいるんだよ」

杉崎「そ、そうですね……。なんかこの事件、割と浅い気がしてきました」

蓮「そんなの全員が最初から気づいているって」

桜野「ま、まあ、うちはラジオを続けましょう」

杉崎「収録中っていうか、放送中に決着がつきそうッスね……誘拐事件」

桜野「では、最後の五・七・五です。こほん」

『真面目にさ 仕事をしろよ 生徒会』

杉崎&蓮『一般生徒の素直な反応キタ—————！』

桜野「まったく、失礼しちゃうわよね」

杉崎「いえ……俺が言うのもなんですが、すげえ気持ちわかります」
深夏「あたしもわかる」

真冬「真冬もわかります」

蓮「俺もだな」

桜野「なによ！ やるべきことはちゃんとやってるわよ！」

知弦「やらなくていいことも大量にやっているけどね」

桜野「不愉快だわ。このコーナー、終了」

杉崎「そういう態度が駄目なんだと思います！」

桜野「さて……じゃあ、終わりの近づいてきたところで、フリート
ークしようか」

蓮「今までも充分自由だったがな……」

深夏「お、会長さん。メール来てるみたいだぜ」

桜野「え？ なになに？」

真冬「ええと、ですね。『妹が誘拐されていた件ですが、無事解決
しました』らしいです。良かったですね！」

杉崎「おお……解決したか。良かった良かった」

知弦「……ちっ」

蓮「すっげえ聞こえてるよ、姉さん。その舌打ち」

知弦「なんのことかしら」

杉崎「録音&放送されているっていうのに、なにその自信満々な開
き直り！」

知弦「でも……随分あっさりと解決しちゃったわね。どんな犯人だ
ったの？」

真冬「ええと……よくわかりませんが、最終的には、攫さらわれた
妹さんが、自分で犯人を叩きのめしたらしいです。犯人さんは……
今、重体です」

杉崎&蓮『二万円欲しかっただけの犯人————！！』

真冬「妹さんも、基本的には犯人さんに遊んでもらっていただけのようですよ。でも……たまたまこのラジオを聴いていて、自分が攫われていることに気付いて、慌てて犯人をボッコボコに……」

杉崎「俺達のせいかつ！」

深夏「結局、なんで二万円欲しかったんだ、コイツは……」

真冬「えと、ですね。メールによると……うん、なんか、犯人さんは、意識を失う前、『この子の姉に……貸したままの二万円を……返してほしかった……だけなのに。ガクリ』と倒れたようです」

蓮「いたたまれねー！　っていうか、諸悪の根源は姉か！　リスナ——か！」

真冬「そのリスナーさんから送られてきたメールの最後は、『悪は滅びるのよ！　あつはっは』で締めくくられています」

杉崎「このラジオのリスナーはろくでもないな！」

蓮「キャラがりナ——イン——スみたいだ……」

真冬「ま、まあまあ。一件落着ということ……」

杉崎「……俺、この放送終わったら、犯人のどこ見舞いいくわ」

蓮「俺もだ。助かってくれ……」

桜野「こ、こほん。ええと……いろいろありましたけど、このラジオもそろそろお別れの時間がやってまいりました」

杉崎「やっとか……。短い時間の割に、驚くほどディープだった……」

蓮「というか、カオスだったよな……」

桜野「最後は、『今日の知弦占い』でお別れです。それでは皆さん、また来週」

蓮「来週もするのかよ……コレ……」

♪ 神秘的なBGM ♪

知弦「では、今日の知弦占いを。」

当校の獅子座のあなた。近日中に、『世にも奇妙な物語』っぽい事態に巻き込まれるでしょう。注意してください。タ〇リを見かけたら全力で逃げなさい。

ラッキーカラーは《殺意の色》。どす黒いか、真紅か、その辺は各々のイメージに任せます。

ラッキーアイテムは《核》。常に持ち歩けるとなおよし。貴方がメ〇ルギアなら、それも可能となるでしょう。

最後に一言アドバイス。

『死なないで』

以上、知弦占いでした」

杉崎「怖いですよ！ 獅子座の人間、今日が終わるまでビクビクですよ！」

知弦「また来週、この時間にお会いしましょう……」

蓮「やっぱり来週もやるんだ……」

知弦「……獅子座以外」

杉崎「獅子座あああああああああ！！！」

♪ ED曲《弟は白骨化していた》♪

第三話 放送する生徒会？（後書き）

長い……。まさか、ラジオがこんなに長引くなんて……。感想と、アンケート、お待ちしております。

第三話 放送する生徒会？（前書き）

今、一年C組の話を執筆中です。

薄野虎太郎は、やっぱり良いキャラですね！

それでは、「放送する生徒会」最後となります。
どうぞw

第三話 放送する生徒会？

「今日の放送は大好評だったねー！」

例の番組の放送があつた後の放課後。桜野は大満足の顔で、生徒会室でふんぞり返っていた。姉さんも、楽しそうにニヤニヤしている。

しかし……俺と杉崎、椎名姉妹は、すっかりげんなりしていた。

桜野と姉さんに聞こえないよう、小声で真冬と会話する。反対側では、杉崎と深夏も同じことをしていた。

「（なあ、真冬……。あれ……。好評だったように見えたか？）」

「（いえ……。少なくとも、うちのクラスはドン引きでした。ポジテイブ男の薄野君やハイテンションなチートさんでさえも、顔を真っ青にしていましたしね……。）」

「（そうか……。うちのクラスは、あの二人に氣を使って、皆、愛想笑いしてくれていたよ。……目は笑っていなかったが）」

「（それはまた……。大変でしたね……。）」

真冬が同情の笑みを浮かべたところで、桜野がこちらに視線を向けてきた。俺達はぎくりと体を強張らせる。

「真冬ちゃんのクラスはどうだった？ 皆、大絶賛だったでしょう

！ 後、蓮もクラスの反応……。いえ、手ごたえを言ってくれない？

私、興奮しちゃってて、クラスの皆をよく見ていないのよ」

『う……。』

そんな純粋な目で見つめられると……。こう、事実を言い辛い。さすがの真冬も、そっと視線を逸らしていた。

俺はひきつった笑みを浮かべる。

「あ、ああ……。もちろん、大人気だったよ……」

「え、ええ……。ま、真冬のクラスも同じです……」

「そうでしょう!」

いかん。これで付け上がらせるのも、また問題だ。

「うん……。そうだな。言うなれば、果物の人気ランキングにおける、『カボス』と同じくらい、人気だったよ!」

「はい! 真冬のクラスでも、言うなれば、スー◯マリオブラザーズにおける『逆さメット』くらい、大絶賛されていました!」

「それ、人気なの!?!」

桜野は首をかしげていた。……。よし、うまく誤魔化した。机の下で、密かに真冬と握手を交わす。

しかし、桜野の矛先は、すぐに二年B組の二人に向いてしまった。

「杉崎と深夏のクラスでも、人気だったよね!」

『え』

二人がカチカチに固まる。……。ああ、二人のクラスも……。俺達と同じか。

深夏が視線を逸らしたが、杉崎がすごく歪な笑顔で、震えながら返した。

「ええ……。そうですね。言うなれば、小学生のなりたい職業ランキングにおける、『会計事務』と同じくらい、大人気でしたよ!」

「それは本当に人気といえるの!?!」

杉崎もうまいこと(?)かわしていた。……嘘は言っていない。嘘は。

桜野はしかしすっかり気が緩んでいるのか、「そっかそっかあ」と、実に満足げだ。……まずい。これは、もしかして————

「じゃあ、第二回もやらないとねー！」

『……………』

桜野以外全員……今回は姉さんも含めて、嘆息する。姉さんはある程度ノッっていたけど、それでも、第二回、三回とシリーズ化するとなると、話は別らしい。

全員で、アイコンタクト会議、開始。

(どうする……。アイツ、まだやる気だぞ)

(アカちゃんにしては、執着が深いわね……。一回やれば満足するとふんでいたのだけれど。下手にクラスメイトが気を遣ったことが、裏目に出たわね)

(会長は、あれでも一応、人気No.1ですからね……)

(どうすんだよ……。あたし、もう、あんなの勘弁だぜ……)

(真冬も、もう、無理ですう……)

全員で、うーむと考え込む。桜野は一人、上機嫌で、次の企画を練っていた。

……と、ここで杉崎が手を挙げて、妥協案を提示した。

「会長」

「ん？ なぁに、杉崎」

「その……ですね。こういうのは、ほら、たまーにやるからこそ、味が出るんじゃないかと」

「？ どういうこと？」

「つまり、ですね。二回目をやるにしても、ある程度間をおいた方がいいんじゃないかと……」

「……………」

杉崎の提案に、桜野が考え込む。俺達は全員、杉崎に向けて、グッと親指を立てた。……そう。桜野は、すぐに流行に流される人間。ある程度期間さえおけば、すぐに、こんな企画は忘れてしまうだろうという目論見だ。

桜野は数秒たっぷり悩み……そして、笑顔で答えた。

「そうねっ！ このラジオは、クオリティ重視だもんね！」

「え、ええ」

その割には、クオリティが致命的なぐらい低かった気もするが。

「分かったわ、杉崎！ 次は……そうね。一か月は置いてからにしましょう！」

「そうっすね」

全員で胸を撫で下ろす。

こうして、この、危険すぎるラジオの第二回は、少なくとも一か月はやらないことに決定したのだった。

これで未来は安泰——————

「じゃあ、次は、生徒会のPRビデオの撮影にかかりましょう！
ようやく、映像用の機械が揃ったのよ！」

ドンッと、机の上に置かれる、大きなビデオカメラ。

……………。

『え?』

全員、信じられないようなものを見たように、固まる。
桜野だけは……一人、ニツコリと微笑んでいた。

「さあ、これからが本番よー!」

『……………』

……………。

『いやああああああああああああああああ!』

獅子座じゃないのに、世にも奇妙な悲劇に巻き込まれた俺達であった。

『うちの会長は……一筋縄ではいかないんだよ……。……良くも悪くもな』

【ある生徒会役員の日記より一部抜粋】

第三話 放送する生徒会？（後書き）

次は……シリアス目です。
衝撃展開……かな？

第四話 告白する生徒会（前編）（前書き）

お久しぶりです。

明日から大分に旅行なんですよw 温泉、楽しみです。

さて、今回は、この小説には珍しくシリアスです。これ以上ないっていうくらい、シリアスです。二回言いましたからね？ 決してギヤグ要素はありませんよ？ なんて言っちゃって、シ・リ・ア・スなんですからね！

この第四話の（後編）でまさかの衝撃展開がある予定です。あくまで予定ですので、「あれ？ 全然衝撃じゃねえじゃん」なんてツツコミされても知りません。あくまでもよ・て・いですから！
それでは、第四話（前編）お楽しみください。

第四話 告白する生徒会（前編）

「人生やり直すのに、遅すぎることはないのよ！」

桜野がいつものように小さな胸を張って何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

しかし俺は、一つの違和感に気付いたため、反論を行う。

「桜野」

「なによ、蓮」

「この名言って……昨日も使わなかったか？」

そう、今回の名言は昨日と全く同じなのだ。ちなみに昨日の議題は、『杉崎を更生させる』である。

桜野は、とりわけ冷静に俺の反論を返した。

「昨日は杉崎の過去が少しばかり明らかになっただけでしょう？
今回は、また新聞部が私達生徒会のことを記事にしていたから、その記事を書かれた張本人を更生させるってわけよ！」

昨日の会議は、本当に色々あった。杉崎が深夏に殺されかけたことから始まって、杉崎の二股疑惑、椎名姉妹による凹凸なボケの嵐などなど……。とてもここでは述べきれないほどの濃さだった。

俺は、桜野の言葉に軽くうなずく。

「ふうん。ま、いいんじゃないか？ 個性を消す、とかじゃないんだろ？ 今回は」

「ええ、今回は……」

と、桜野は一度言いにくそうに口ごもると、意を決したように口を開いた。

「……蓮、あなたの過去についてよ！」

「……………は？」

『……………』

空気が……凍った。

全員が絶句する中、桜野はガサゴソと自分の鞆から一枚の紙を取り出す。そのカラフルな紙が、どうやら例の新聞らしかった。

桜野が机の上においたそれを、全員が覗き込む。深夏が、わざわざ声を出して読み上げた。

「なになに……『速報！ 生徒会書記・紅葉蓮は、昔二股をかけていた！』……って、また同じ記事じゃねーかつ！」

思わず新聞を叩きつける深夏。どうやら、杉崎と全く同じゴシップ記事だったことに、軽くイラついているようだ。

真冬が、顔を真っ赤にしながら、俺をフォローしてくれる。

「酷い記事です！ よりにもよってこんなこと書くなんて！ 杉崎先輩のときもそうでしたけど、さすがにこれは新聞部に抗議しないと！」

「はは……そうだな。ありがとう、真冬」

真冬に苦笑を返しながら問題の新聞を手に取り、内容を読んでみる。これも杉崎の時と同様に、詳しいことはまるで書かれていなかった。ホント、藤堂のやつは相変わらずだな……。

桜野は、さすがに昨日のように追及することはしなくとも、それなりに気を遣って声をかけてきた。

「蓮……とりあえず、コレが嘘なのかどうかだけ言ってくれない？
詳細までは……話さなくていいから」

『……………』

俺と……姉さんが黙り込む。今回は俺だけの問題ではないのだが、
だんまりを決め込むのは難しいだろう。

俺は、姉さんに怒鳴られることを覚悟で、口を開いた。

「ふう……。そう、俺は昔、二股をかけていた」

「蓮！」

案の定、姉さんは椅子を鳴らして立ち上がる。俺は、一言「ごめん」とだけ伝えると、苦笑を浮かべた。

「詳細は話さなくていいんだろうけど……このまま隠し通すのは無理があるし、なにより俺の精神がもたないから。話すとするよ」

「蓮！ やめなさい！ あなたがそんなこと話す必要なんてないでしょう！？」 なんて————」

「杉崎、姉さんを止めてくれ」

「……はい」

杉崎に支持を出し、姉さんを強制的に座らせる。

俺は一度深呼吸をすると、もう思い出さないと決めていた、自分の過去を話し始めた。

「あれは……俺が中二の頃だったかな。俺と姉さんには、小さな頃から仲の良い、一人の女の子がいたんだ。その子はいつも俺達のところにてな、そんな時は、まだ人見知りだった姉さんの世話をいつも焼いてくれていた。んで、そんなある日……俺は、その女の子か

ら告白された」

「告白？ それぐらい、いいじゃない。中学生にはよくあることじゃないの？」

桜野が首をかしげる。それに、俺はコクンとうなずいた。

「そう、そこまでは良かったんだ。俺も告白されたのは嬉しかったし、その子のことも好きだった。でも、その時の俺は、まだ、いわゆる『姉離れ』ができていなかったから、その答え自体は後延ばしにさせてもらった。だけど……それが裏目にでてしまい、ちよつとした事件が起こってしまったんだよ」

「事件？」

杉崎が、思わずといった様子で聞き返す。しかし、俺は「すまんと首を振った。

「詳しいことは勘弁してくれ。……んで、とにかくいろいろあって、姉さんが傷つくことになってしまった。だから、俺は、慰めるために、四六時中姉さんのそばに居続けたんだ。……お互いが、『姉弟』という壁を越えて、異性として好きになってしまうほどに、ね」

「……………」

「俺にとって、姉さんは自分そのものだった。昔からずっと俺の隣にいた人、これからも、おそらくは、ね。で、結局、その女の子……カナとも、はっきりとした関係を持たずに、姉さんにも依存してしまった。おそらく、それが……二股って言われているんだと思う」

『……………』

話し終わると同時に、静まり返る皆。俺は苦笑して、淡々と告げた。

「つまりは、俺、紅葉蓮は、自分の事を好きだと言ってくれる女の子一人守ることができなかった。そんな最低なクズやローだった、というだけのことさ」

第四話 告白する生徒会（前編）（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 柄にも合わずシリアスなんか書いてしまいました。

さて、オリジナル番外編とオリジナルキャラの応募ですが、期限をなくしたいと思いますので、書いてほしい話があるという人は、感想にて簡単なあらすじを送ってください。オリジナルキャラについては、簡単な人物説明を付けてください。

皆様さんのご応募、お待ちしておりますーす。

……あ、あと普通の感想も待ってますよー！

第四話 告白する生徒会（後編）

『……………』

全員が黙り込む中、俺は湯飲みを取り、番茶を入れる。うん、まあ、こういう雰囲気になるのは目に見えていたけどね。

湯飲みを机に置き、椅子に座ろうとした時だった。

「先輩」

真冬が今までにないような重い声で俺を呼び止める。何か、と思いい振り向くと、同時に俺の頬に鋭い痛みが走った。

真冬が俺の頬に平手打ちを喰らわせたのだ。

良い音がしたなー、と思いながらも真冬の方を向く。真冬は顔を真っ赤にしながら、肩を震わせていた。

「なんで……………」

「は？」

「なんで、そんなこと言うんですかっ！」

ガシツツと両手で俺の襟首を掴む真冬。そして、慌てて止めようとする役員たちを目で制すると、言葉を続けた。

「先輩は…………先輩は、クズなんかじゃありません！ 確かに、先輩は紅葉先輩とその女の子を守れなかったかもしれませんが、でも、その時がどうであろうと、三年前の冬に、真冬は蓮先輩から色んなものを貰いました！ それは勇気だったり、自信だったり、様々です。先輩のおかげで、真冬は救われたんです！」

「…………でも、俺のことを好きと言ってくれる人を守れなかったこと

に、変わりは——」

「守ってくれました！」

「え……？」

予想外の言葉に、思わず真冬の顔を見る。真冬は、一呼吸置くと、わずかに顔を赤らめながら、言った。

「先輩は、真冬を守ってくれたじゃないですか。真冬は……先輩のことが、紅葉蓮先輩のことが、大好きです。これは、友人としてではなく、異性として、一人の女の子としての気持ちです。だから、先輩は誰一人守れなかったわけではありません」

真冬がニツコリと微笑む。

俺は、ただ言葉を失っていた。

それは、突然の告白。突然すぎる告白。状況としては、カナのときとなんら変わらない。言葉自体も、あのときとほとんど変化はない。なのに……なんで、こんなに胸が締め付けられるように痛むのだろう。以前はこんな風には感じなかった。カナに告白されたときだって、「ああ、告白されたんだな」という風にしか感じなかった。……ああ、そうか。

これが、本当の『恋』なのだろう。

今になって気が付くなんて、俺はなんて馬鹿なのだろう。カナや知弦姉さんのときとは違う、この気持ち。俺は、やっと自分の気持ちに気が付いた。

俺は、椎名真冬のことが好きだ。大好きだ。今回は、本当に、心の底から彼女のことを愛している。でも……。

「俺に、真冬を好きになる資格なんて、あるのかな……」

思わず、そう呟く。

俺には、この子を幸せにしていける自信がない。経済面においても、精神面においても、真冬と一緒にいられるほどのモノを持っていない。そんな俺に、真冬を好きになる資格なんて――

「あるに、決まっているじゃないですかっ！」

「！」

「真冬は、先輩のことが好き。先輩も、真冬のことを好き。人を好きになる資格や理由なんて、それだけで充分です！ だから、真冬は……、真冬は……」

込み上げてきた涙を、隠そうともせず流し続ける真冬。ああ……俺の、完敗、だな。

ポンと真冬の頭に手を乗せる。

「先輩……？」

「真冬……本当に、俺のことが好きなのか？」

「……はい、もちろんです」

「そうか……じゃあ、次は俺の番だな」

そこで一旦言葉を切って、周りを見渡す。

桜野は、何に感動したのか子供のように泣きじゃくっている。

杉崎は、穏やかな笑顔で、「まあ、最初っから、真冬ちゃんは蓮さんと一緒になるとは思ってましたけどね」と言っていた。

深夏は、「真冬を泣かせたりしたら、承知しねえからな！」と拳をこちらに向けている。

そして、姉さんは、「良かったわね、蓮」と涙目で笑っていた。皆が笑顔でこの場にいる。どうやら、これが俺の望んだ光景のよ

うだ。

改めて真冬の方を向き、俺は、告げた。

「俺も、真冬のが好きだ。多分、以前からそうだったんだと思う。気付いてやれなくて、ゴメンな」

「先輩……」

「もう俺は、あのときみたいな過ちは繰り返さないよ。……真冬、俺と付き合ってくれ」

言った。やっと、言えた。カナのときには言うことができずに、彼女を傷つけてしまったが。今回は……言えたんだ。

「先輩……!」

真冬が泣きはらした顔で、俺の胸に飛び込んでくる。あ、どうやら俺に対しての男嫌いは発生しないみたいだな、今更だけど。

真冬は告白に対しての返事はしていない。そもそも、そんな言葉なんて、必要じゃない。

腕の中にいる真冬を抱きしめながら、俺は湧き上がる幸福感に、ただただ酔いしれていた。

☆

あの後、俺と真冬の二人を残し、会議は終了した。俺達もそのまま帰るつもりだったのだが、四人に「まだ話すことがあるんじゃないの?」と言われ、半ば強制的に残っている。……おそらく、あい

つらはどこかで俺達のことを覗いているのだろう。

俺達は、いつもの席に座っている。

俺が桜野の向かい側で、真冬がその隣。大してなんとも思っていなかったが、今はとても嬉しく思える。

「先輩」

隣の真冬が、優しい声で俺を呼ぶ。

「ん、何？」

「先輩は……辛かったですか？」

主語の抜けた、不完全な質問だが、意味は伝わった。

中学生のときのことだろう。

確かにあのときは辛かった。杉崎の台詞じゃないが、自分の大切なものに順番をつけることができず、結局全員を傷つけてしまったから。でも、カナに出会い、姉さんに出会い、告白されたことで、今の俺があるのだと思う。あのとき失敗してしまったから、今こうして真冬が隣にいるのだと思う。

「今改めて考えてみると……案外、そこまで辛いもんじゃなかったのかもな」

人生の中で起こる出来事には、全て何かしらの意味があるのだという。だとしたら、中学の頃の俺は、物凄く恵まれていたのではなかろうか。

「先輩は……高校生になってから、泣いたことはありますか？」

「突然だな……。……いや、ないと思う。どれだけ悲しくても、一回も泣かなかったよ」

「そうですか……。……先輩、ちょっとこっちに来てくれませんか？」

真冬は、席を立つと何もない床にペタンと座った。俺もそれに続く。そして、真冬は、唐突に俺の頭をギュッと抱き締めた。

「☆◆HIT▲!？」

見事に俺の頭は真冬の胸に埋まっている。え、ちよつ、何!？突然幸セイベント!？

俺の混乱をよそに、真冬は呟いた。

「泣いても……。いいですよ」

「……は？」

「だから、真冬の腕の中でだけなら……。泣いても、いいですよ」

「先輩は、今まで頑張りすぎました。中学の失敗から、今日まで。全力で生きてきすぎました。……。少し、休みませんか？」

「……………」

その言葉と同時に、涙が流れ出した。

これまでの俺の頑張りは、報われたのだろうか。

これまでの俺の悲しみは、晴れたのだろうか。

これまでの……。俺の……。

「ううっ……。つく。……。うわああああああつ!!」

俺は、泣いた。

これまで流せなかった涙を、枯らすかのように。これまでの自分を、労うかのように。

「先輩……お疲れ、さまでした」

俺は、その後もしばらく真冬に抱き締められながら、泣き続けた。

第四話 告白する生徒会（後編）（後書き）

さて、いかがだったでしょうか。

まさかの序盤でハッピーエンドです。終わりませんけど。

文句なら感想で承ります（笑）

オリジナルエピソードやオリジナルキャラの募集、どしどし待ってまゝです。

感想もよろしくね！

存在しないエピソード（前書き）

とりあえず一巻の内容は終了ですね。
次回からは番外編を行います。

存在しないエピローグ

《スタッフ活動レポート 其の九十七》

- ・怪談流布による猜疑心増大プロジェクト 失敗
- ・定例の昼食動向調査 奇妙な校内放送による妨害により失敗
- ・生徒会へのスキャンダルによる牽制 効果認められず
- ・杉崎鍵の思想に準ずる形での学園干渉 失敗
- ・生徒会の近況 杉崎鍵と紅葉蓮の過去が露呈した影響か、団結力が増した模様。最早予断を許さない。

○今年度の生徒会に関する総合的所感

一言で言って、非常にまずい。

しばらく様子を見守ったが、今年の生徒会は確かに厄介のようだ。本人たちに自覚が無いのは不幸中の幸いだろうか。いや、自覚がない分、余計タチが悪いとも捉えられる。

なんにせよ、本腰を据えて、早急に対処法を検討すべきである。

結果だけ見れば、今年度の我々の成果は惨憺たる結果である。

《スタッフ》の思想統制がとれていないことも、ここにきて、歪みとして表れ始めた。

やはり、あの生徒会は危険である。

《企業》の未来のためには、排除は必須。

かといって、あまりに直接的に動きすぎれば、《ルール》に反してしまう。

もどかしい。このもどかしさが《スタッフ》全体の不協和音に繋がりが、その隙はあの生徒会に活躍を許し、また、《スタッフ》の苛立ちの原因となる。

完全なる、悪循環。

最早、猶予はない。

……そろそろ、あの生徒会を、本気で潰さなくては。

存在しないエピローグ（後書き）

近いうちにCLANNADの小説を掲載したいと思っています。
是非読んでくださいね♪

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

久しぶりです。高校が始まったため、更新するのが遅れました。

さて、アクセス数突破記念ということで、今回はreiさんからのリクエストで、蓮と真冬のデートをやりたいと思います。

自分なりに、こんなかんじかな？ と頑張りました。少しバカテス風味なのは見逃してください。

これからも、「もう一人の優良梓」をよろしくです。

—————杉崎SIDE—————

「後一步を踏み出せない友人の肩を押してあげてこそ、真の友情と言えるのよ!」

会長がいつものように小さな胸を張ってなにかの本の受け売りを偉そうに語っていた。

俺は、その言葉に頷きながらも、現在生徒会室で起きている異変について会長に問うた。

「会長」

「なによ杉崎」

「いえ、その……今日はなんで俺と会長の二人しか生徒会室にいないんですか?」

いつもならば六人全員が揃って雑談を繰り広げているはずなのだが、今日に限って俺達しかいない。深夏は授業が終わった瞬間に、真冬ちゃんを迎えにいったし、知弦さんも蓮さんの手を引っ張ってダッシュで帰っていた。

会長は素晴らしいほどの笑顔を俺に向ける。

「いい質問ね、杉崎。……ここで問題です」

「急にですね」

「……蓮と真冬ちゃんが付き合いだしてから一体どれくらいの時間が経ったでしょうか?」

「……………は?」

「あ、あのー……」

「ど、れ、く、ら、い、たっ、た、で、しょう、か！」

「……に、二週間？」

俺の解答に会長は「そうよ！」と叫ぶ。いや、だからいったいなんですか。

「あの二人が付き合いだして、もう二週間……」

「そうっすね」

「それなのにまだ一回も手すら握ってないっていうのはおかしいんじゃないの!？」

「……………」

会長の叫びに思わず絶句する。おかしいのはあんだだ。嫌な予感を全身に感じながらも、俺は会長に真相を求めた。

「た、単刀直入にお願いします……」

「つまり！ お互いに奥手すぎて全然進展を見せようとしなない二人を、私達の力で無理やり進展させちゃおうってわけよ!!」

「はぁ……」

深海二万マイルよりも深いため息をつく。いつも思うんだがこの生徒会は余計なことしすぎじゃないか？　そういうのって万事屋とかの仕事だと思う。

俺が納得したのを読み取ったのか、会長は「助っ人を発表するわ!」と言って、生徒会室のドアを開けた。

「さて、今回二人のデートをサポートしてくれる人達は……この方達です！」

「碧陽学園アイドル！」

「碧陽学園超能力者！」

「碧陽学園男の娘！」

「碧陽学園チート！」

「碧陽学園アキバ！」

「碧陽学園紅蓮隊ヘッド！」

「六人揃って……」

『生徒会戦隊、ガクエンジャー！！』

「おいまてこら」

いきなりハチャメチャな登場をしてくれやがった変態共を止める。
ほぼ全員の正体が一瞬でバレてるし。それに———

「あんた達はまだ時間軸的に登場したらダメだろ、中目黒！ 栗落
花さん！」

両端でポーズを決めている二人に思いっきり怒鳴る。ってか栗落
花さんは碧陽学園生徒じゃないじゃん！

会長が俺の肩をポンポンと叩く。

「会長？」

「心配することはないわ、杉崎」

「はぁ……どうしてですか」

「それはね……この作品が二次創作小説だからよ！！」

「無茶なメタ発言かました———！ なんてそういうこと言っ
ちやうんですかつ」

「いいのよ、所詮今回の話は外伝なんだから」

「そういう問題じゃあないでしょう！？」

「読者の皆様へ。今回はあくまで外伝です。なので、メタ発言。暴
走。キャラ崩壊を全力でやりたいと思っています。ご了承ください」

「もう後戻りできないところまでキタ————！！」
「あ、それと三年生からも二人ほど手伝ってくれる人がいるわよ」
「もっとダメだ————！！」

大丈夫なんだろうか、このままで。

俺は、暴走する会長から目を逸らしながら、これから甚大な被害を被るであろう蓮さんと真冬ちゃんの身を案じていた。

——蓮SIDE——

三日前……。

「俊哉」

「ん？ なに、蓮」

「そういえば、あのチケットはどうした？」

「あのチケットって————僕がこの前福引で当てた葵グランドパークのプレミアムチケットのこと？」

「ああ。確か今週末がプレオープンの日のはずだが、藤堂を誘って行ってみたりはしないのか？」

「な、何を言っているのさ蓮！ だって、あのチケットを使って入場したら、葵グループの力で一緒に行った人との結婚を強要されちゃうんでしょ？ そんなことになったら、りっちゃんが可哀想じゃないか」

「そりゃ、向こうも『葵グランドパークを訪れたカップルは幸せに

なれる』なんてジンクスを作り上げようと必死だからな。来園するカップルが結ばれるように色々な手出しをしてくるだろうが――――

「うんうん。そうだよな」

「だが、藤堂も満更じゃないと思うぞ？」

「……ほえ？」

「いいじゃないか。勇気を出して誘ってみたら。意外とすんなりOKをもらえるかもしれないぞ」

「あ、あはは。またまた蓮ってば、冗談ばかり。僕なんかがりっちゃんと結婚なんて、そんなのあるわけないじゃないか。りっちゃんはある見えても大金持ちの娘さんなんだよ？」

「ふむ。まあ、お前がそういうならそれはそれで構わないが。けどそれなら、チケットはどうしたんだ？」

「丁度身近に結婚を考えている人がいたからね。その人にあげたよ」

「そうか。そんなヤツがいるなら都合がいいな。そのままうまく結婚になれば、葵グループも喜ぶだろう」

「そうだね。うまくいけば全員が幸せだもんね」

「その連中、うまくいきそうなのか？」

「うん。あとは時間ときっかけの問題だと思うんだ」

「そうか。うまくいくといいな」

「大丈夫。きつとうまくいくよ」

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

今日はここまでです。

記念なのに日を跨ぐっていうのは、如何なものなんでしょうか。

とりあえず、バカテスっぽい感じになっています。

結果が見えている人も、そうではない人も、見捨てずに最後まで付き合ってくれると嬉しいです。

それでは、また次回♪

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

こんにちは。この話を書いたらお気に入り数が一挙に三件も減って正直凹んでいるふゆいです。

やりますよー、今日もじゃんじゃんいっちゃいますよー。

補足…この話はバカテスっぽい感じになっておりますが、デート内容はオリジナルとなっています。遊園地だけとは思わないよ！

さて、では今回もいっちゃおうとしましょう！ ……お気に入りが減らないといいな。

とある休日の朝。

カーテンの隙間から差し込む陽の光と雀の鳴き声で目を覚ますと、

「蓮さん、おはようございます」

俺のベッド脇に真冬がいた。

「今日はいい天気ですね」

シャツとカーテンを開く真冬。陽光が更に強く部屋の中に差し込んできた。

「ん？ ああ、そうみたいだな」

強い光に目を細めながら、まじまじと我が彼女の姿を見る。

今日は休日だからか、いつもの制服姿ではないようだ。上は桃色の長袖のカーディガンで、その下に薄い黄色のカットソーを着ている。下は薄手の膝上程度のスカートで、下着が透けない為のインナーが中に見える。ペチコートとかいうヤツだったか？ いつもは上下共にスポーツジャージという格好なので、今日はこいつにしては随分と気合の入っている格好だといえるだろう。

なんて、柄にもなくファッション観察をしている自分に驚く。寝惚けているのかもしれない。

眠気を取り払うように頭を大きく振って、真冬に向き直る。

「改めて、おはよう、真冬」

「はい。おはようございます蓮さん」

「よいしょ、つと——」

布団を押し分け、ベッドから出る。

そういえば、どうして真冬が俺の部屋にいるんだ？ 今日のコイ

ツと何かの約束をしていたっけ？

寝起きのため本調子には程遠い頭で記憶を掘り起こす。ダメだ。覚えがない。

覚えがないのなら、約束ではないのだろう。第一、俺が真冬との約束を忘れるわけがない。だとすると……。

他の理由を少し考えて、一つの結論に辿り着く。そうか、そういうことか。

「悪い真冬。俺の携帯を取ってくれ」

「電話でもするんですか？」

「ああ、そうだ」

真冬が渡してくれた携帯を操作し、番号をプッシュする。

コイツがここに居ること。それは——

「ああもしもし？ 警察ですか？」

不法侵入、もしくは盗難目的（聖典に限る）だ。

ドドドドドドド！ ガチャツ！

「姉さんっ！ これは一体どうしたことっ！」

「あら蓮。おはよう」

居間に駆け込むと、姉さんはソファに座って牛乳を飲みながらにこやかに朝の挨拶をしてきた。

「おはようじゃないっ！ どうして真冬が俺の部屋にいるんだよっ！ おかげで俺は警察のオッサンにすっげえマジな声で『リア充死ね』って言われちゃったじゃんか！」

彼女が無断で俺を起こしに来た、と告げた時の相手の反応は俺の心に深い傷を残してくれた。寝惚けていたとはいえ、一生の不覚だ。

「……え？」

そんな俺の言葉を受けて、姉さんが何度か大きな瞳を瞬かせる。いつもの姉さんには似合わない、とても子供っぽい仕草だった。

「真冬ちゃんが……？」

姉さんが頬に手を当てて困ったような顔をする。

この態度、もしや真冬の独断か？ 姉さんの手引きじゃないのか？ もしもそうだとしたら、いきなり朝から怒鳴るのは少々浅慮だ

ったかもしれない。それにしても、真冬も随分と大胆になったな。

「ああいや、怒鳴ってゴメン。俺はてっきり姉さんがアイツを勝手に俺の部屋に上げたものだト————」

「もう、真冬ちゃんったら奥手ねえ。折角お膳立てしてあげたのに何もしないでいるなんて勿体な————あら蓮。どうして私に向かって花瓶を構えているのかしら？」

「やっぱり、アンタのせいカ……！」

この姉には一度きつちりと常識を教えてやるべきだろう。

「蓮さん。お義姉さんを虐めちゃダメです」

「止めるな真冬。俺は弟としてこの姉の再教育をしないとイケないんだ」

遅れて現れた真冬が俺の腕を掴んで邪魔をしてくる。なぜか、姉さんのことを名前と呼んでいなかったが、そこはツツコまない方が善作だろう。

「言うことを聞かないと、この本を紅葉先輩と読めますよ？」

真冬が取り出したのはA4サイズの冊子。うん？ あれは……まさか！？

「ま、待てっ！ それは女子供の読むものじゃない！ 早くこっちに寄越すんだ！」

よりによってあの本か！ クラスで最も純情でエロいムツツリスケベと言われている要ですら唸らせた思考の一冊が見つかるなんて最悪の事態だ！ っていうかどうやって見つけ出したんだ！？ 一

緒に暮らしている姉さんや母さんですらわからないような場所に隠したはずだぞ!？」

「あら真冬ちゃん。それは蓮が地理の資料集の表紙を被せて机の一番下の引き出しの底板に作ったスリットの中に隠している秘密の本じゃない?」

今ほど杉崎の一人暮らしが羨ましいと思ったことはない。

「わ、わかった。姉さんは許そう」

言われた通り花瓶をおろす。なんて汚い脅迫なんだ。

「そうです。それなら、この本は————」

くそっ。取り返したら今度こそ絶対に見つからないように隠してやる。いっそのこと鍵でもつけて厳重に————

「燃やすだけで許してあげます」

「すまん真冬。どう考えてもそれは許された時の対応じゃない」

普通は許してくれたのなら本を返してくれるはずだ。

「じゃあ、この本を燃やしても許してあげません」

「燃やさないという選択肢はないのか!？」

「大丈夫です。この前真冬のクラスの国立さんも、アキバ君の秘蔵の本を焼却したって言ってましたから」

「葉露の話なんてどうだっていいわ!」

既に恋人となっているコイツだが、たまに考えについていけなく

なる。

「やれやれ……んで、どうして真冬が来ているんだ？」

「……デートを」

「……うん？」

「蓮さんと、デートをしたいんです」

そう言ってポシエットから小さな紙切れを取り出す真冬。

どうやら何かのチケットのようだ。えーつと……

「あら。葵グランドパークのプレオープンチケット？　しかもプレミアムって書いてあるから特別なチケットじゃないの？　凄いわ真冬ちゃん。よくこんなもの手に入ったわね」

「優しい人がくれたんです」

「そう。……ぷぷっ。よ、よかったわね。あら、蓮？　どこに電話をしているの？」

「ちょっとクズ野郎に用が出来たんだ。……後、アンタ含めて生徒会の奴らへの制裁があるから覚悟しておけよ」

携帯電話の番号通知をOFFにして俊哉の番号を呼び出す。

数秒の呼び出しの後、怨敵は軽快な声で電話に出た。

『はいもしもし？　どちらさまですか？』

「……………キサマヲ
クロス」

『え！？　なににに！？　本当に誰！？　メチャクチャ怖—————
——（ブツッ）』

電話の向こうで狼狽する声を聴きながら通話を切ると、少しだけ気分が晴れた。

「蓮さん、行きましょう?」

俺の手を真冬がそっと握る。余程行きたいのだろう。

「葵グランドパーク以外なら、喜んで」

けど、その願いを叶えるわけにはいかない。

これが普通のアミューズメントパーク程度なら喜んで行こう。だが、これは葵グループの危険な企みが裏に存在する危険な企画だ。そんなものに俺と真冬で参加するなんてことになったら、そのままなし崩しで結婚まで持ち込まれてしまうだろう。いくら相思相愛だとはいえ、さすがに高校生で結婚はしたくない。もうちょっとだけ気楽な学生でいさせてくれ。

「心配しなくても、今日のデートはここだけじゃありませんよ?」

真冬がポケットから一枚の紙切れを取り出す。そこにはこう記されていた。

【映画館で映画を観る】

←

【ウィンドウショッピング】

←

【ファミレスでお昼ご飯】

←

【葵グランドパーク】

「今日のスケジュールです」

「これはお前が作ったのか？」

「いえ、先ほど言った方がくれたんです。親切な方ですよ」

「絶対に何か仕掛けがあるだろう！ 姉さん！ どうなんだ！？

…ってあれ？」

後ろを振り返るが、そこにもはや姉さんの姿はなく、代わりに一枚の書置きが残されていた。

『かわいい弟へ。真冬ちゃんとお幸せにね（笑）』

「あのクソ姉が……」

結局、そのまま真冬と、初めてのデートに向かうこととなった。

って、そういえば真冬とデートしたことなかったんだな、俺。なんかいろいろあったせいで緊張とか全て吹っ飛んじまってんよ。…くそう。

はい、どうも。いつもあなたのそばでカップラーメンをすすっている、ふゆいです。

もう五月ですねえ。五月と言えばやっぱり鯉のぼり！

あの格好良さといったらもう！

………はい。わかってます。あれですよ。………中間考査。

なんであんなもんがあるんですかね？ テスト多すぎるでしょ。大体あんなにたくさん教科をテストして一体どういうつもりなんでしょうか？ 日常生活で物理なんて使う機会ないでしょう。

………はい。愚痴はここまでとしておきましょう。

今回は前回の続きです。ていうか後一、二回は続くと思います。べ、別に本編のストックが切れているわけじゃないんだからね！

とりあえず、感想ください。ただそれだけです。

それではまた次回お会いしましょう。

さよ～なら～♪

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

久しぶりです。更新遅れました。

学校が忙しくてなかなか書く時間がなかったんですよ……。

おそらく、後二話くらい続くと思います。
すいません。

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

まず最初に向かったのは、街中にある有名な映画館だ。

なんでも、例の“優しい人”から、割引券を貰ったらしい。

「うっは☆ 楽しみです〜!」

俺の隣で、期待に満ち溢れた表情をしている真冬。

ふむ、まあ、こんなに喜んでくれるなら、出かけた甲斐もあったな。

「んじゃ、早いところ観ようぜ。というか、何の映画を観るんだ?」

「えつとですね〜……え?」

「ん? どした?」

「いえ、あの……」

真冬が、チケットを見て固まる。不思議に思っ、横から覗いてみると、そこには――――

【ゾンビハザード3 〜迫りくるウイルスの恐怖〜】

「き、恐怖映画!? しかもメジャーの!」

「あ、あう……」

二人して、驚愕する。以前、桜野を怖い話でからかっていた俺たちだが、ここまでガツリな恐怖モノは、はつきりいつて……苦手だ。

真冬が、顔を青くして、わずかに震えている。

「ど、どうする？ 映画はやめて、別のところに行くか？」

「え？ ……いい、いえ。観ます！ ……どさくさで抱きつけるかもですし」

「？ まあ、お前が良いなら良いけど……」

今、なんか最後に付け加えなかったか？ コイツ。

「じゃ、さっさと観て終わらせるか」

「そ、そうですね」

俺たちは、映画館へと入った。

映画を観終わり、俺たちは商店街を歩いていた。……無言で。

「……………」
「……………」

うん。あれだ。さっきの映画が衝撃的すぎた。R指定かかってないくせに、なんであんなグロイのか。普通飛ぶか？ ……顔が。俊哉のヤツめ……すっげえ地味な嫌がらせしやがって……。しかもあの趣味は絶対姉さんだ。賭けてもいい。

「真冬、大丈夫か？」

「……………あうう……………」

隣の真冬に声をかけるが、かなりのグロッキー状態の様子。こんなことして何が面白いんだ？ あのお節介共は。

まあ、いつまでも落ち込んでいても仕方がない。

俺は、真冬をある程度まで復活させると、これからどうするかを話し合った。

「で、これから何処に行く？ 予定表ではウィンドウショッピングらしいけど」

「そうですね……真冬はあまりこの辺には来ないから、よく分からないんですよ」

「奇遇だな、俺も全くと言っていいほど知らん」

はあ、と二人でため息をつく。俺達ってどんだけ引き籠りなんだよ……。

行くあてもなく、適当に商店街をうろついていた……そんなときだった。

突然、バァンッ！ という音が響き渡ったのだ。

「な、なんだ!？」

「じ、銃声!？」

慌てて、音のした方へと急ぐ。

そこには、一人の女性が、もう一人の女性に抱きかかえられている姿があった。

「だ、大丈夫ですか!」

「どうしたんだ!? 一体なにが————あれ?」

近くまで行ったところで、俺は足を止めた。

よく見ると、抱きかかえられている方は、男性だ。美少女のような顔だが、俺には分かる。なぜなら————

「こんなところで何やっているんだ? 要^{かなめ}」

我が三年A組クラスメイトの、藤林要だったからだ。
ということはもう一人は————

「か、要君! しっかりして!」

「やっぱりお前かよ……海原……」

巨乳ロングヘアの、海原空だ。

こいつらはこんなところで何してるんだ……?」

俺は真冬を連れて、速やかにそこから離れようとする。理由は簡単、明らかに俊哉や桜野の送った刺客だからだ。

しかし、そうは問屋が卸さないらしい。

海原が真冬の脚を掴んだのだ。

「ひっ! な、なんですか!?!」

「助けて! お願いだからウチの大切な要君を助けて!!」

「そ、そんなこと言われても……」

「う……ぐう……」

「！ か、要君！？ 気が付いたのね！」

なんだこの三文芝居は……。

銃声の音はどうやら傍らの紙鉄砲らしいし、赤く染まっているアレは、おそらく演劇部である要が持ち出した血糊だ。

俺は、真冬の手を掴むと、海原の拘束を無理やり引っぺがし、ダッシュでその場から立ち去った。

「あっ、ちょっ、蓮君！？ オレ達を見捨てる気か——
——！？」

「へるぷあーす——————！！」

「うるっせえ————！！ とつとどっかに消えやがれ——
——！！ 特に要はこの前俺からぶんどったエロ本でも読んでりやいい
だろうがあ————！！」

「ぶはっ！ れ、蓮君！？ 急に何を言いだすんだよ！ オレはそ
んなことしてないだろ！ ……って、あのー、空さん？ 貴女はな
んで右手に釘バットを持っていらっしゃるのですか？」

「今、レンレンが言ったことは、本当なのかな？ かな？」

「まあ待つんだ空。オレだって男なんだからそれぐらい見逃してオ
レの頭に鋭い痛みが————！！」

最後に、なんか要の断末魔の叫びが聞こえたような気がするが、
俺は無視して突っ走った。

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

感想、オリジナルストーリー及びキャラ募集、お待ちしております。

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

高校のテストの難しさの絶望しそうな、ふゆいです。

今回も絶賛デート話。おそらく次回まで続くかと。

本編をお待ちになっている皆様。もうそろそろです。二心まで後も
う少し辛抱下さい。

それでは、どうぞ☆

「はあっ……はあっ……ふう。ここまで来ればあのバカ共も追ってこないだろ……」

「あ、あうう……」

商店街でクラスメイトの幼馴染コンビに絡まれた俺達は、面倒事に巻き込まれる前にダッシュでとある家電量販店に逃げ込んでいた。隣では、真冬がなぜか顔を真っ赤にして目を回している。

「だ、大丈夫か？　なんかヤバいくらい顔が赤いぞ」

「い、いえ、その……き、急に手を繋がれたからびっくりしちゃって……はう」

「あ、悪い。嫌だったか？」

慌てて手を離そうとする。しかし、俺が腕を動かすより先に、真冬が握っている手に力を込めた。

「そ、そんなことないです！　というか、真冬と先輩は、その……こ、恋人同士なんですから、これぐらいが丁度いいんです！」

「そ、そうか……？」

「はい！」

半ばヤケクソ気味に叫ぶ真冬。あのさ、恥ずかしいのは分かったから、こんなところで叫ぶのは勘弁してくれないだろうか。さっきからこっちを見ている人達の視線がやけに生暖かいんだよ……。

「それにしても……いきなり予定が狂っちゃいましたね……」

「俺からしてみればラッキーだけどな」

「あう……お買い物、楽しみだったのに……」

真冬が、「はぁ……」とため息をつく。そこまで落ち込まれるとは……やれやれ、仕方ないな。

俺は真冬の手を引っ張り、二階へと続くエスカレーターへと足を進める。

「先輩？ どこに行くんですか？」

「お前の想像したものとはちょっと違うかもしれないけど……まあ、俺達らしいデートを楽しもうぜ。幸い、葵グランドパークまで時間はたっぷりあるからな」

「……そうですね。せっかくのデートですし。よおっし！ それじゃ、行きましょう、蓮先輩！」

ようやくいつもの調子を取り戻した真冬。うん。やっぱりコイツには笑顔が一番似合うよ。

俺達が最初に向かったのは————ゲームセンター。

俺達らしいっちゃ俺達らしいが……デートで来るべき場所ではないわな、普通。

「先輩！ あっちに对战用のガ○ダムアーケードがありますよ！」

「そうだな。でも、二つしかない上に、一つは使用中だぞ？」

「……ふふふ。いい度胸です。どこのどなたかは知りませんが、早速真冬がコテンパンにしてあげますよ」

そう言つて、真冬がゲーム台の前に座る。そして、ポシェットから財布を取り出そうとしていたので、俺は無言で百円玉を入れた。

「先輩？ いいんですか？」

「こういうときは男が払うのが常識ってモンだろ？ 遠慮するな」
「は、はい。ありがとうございます」

屈託のない笑顔を向けてくる真冬に、俺はわずかに顔を赤らめるとたたく……惚れたナントカってやつか？
タイトルが表示され、機体選択場面へと移る。

「……俺的には、ザク？を所望するんだが」

「先輩、いくらなんでもそれはないです」

「くっ……ここでもザクはザコ扱いか……」

「それ以前にスペックが悪すぎますって……」

俺の願いも空しく、真冬はガンダム（初代）を選んだ。どうやらこのゲームは初代のみ登場する類のようで、やけに懐かしいモビルスーツ達が列をなしていた。

一方、対戦相手を選んだモビルスーツは————

「ボール？」

「なっ……！ ま、真冬をバカにしているのですかっ！」

真冬が怒りを露わにする。まあ、無理もないだろう。おそらく初代シリーズで一番スペックの低い『ボール』で勝負してきたのだから。

画面が変わり、戦闘へとシフトする。

どうやら基本的な設定は『ガンダムVSガンダム』と同じらしい。機体ごとにコストが決まっていて、それを消費させていくことで勝負をつけるのだ。

「真冬……行きます！」

某連邦の白い悪魔の如き台詞で、真冬が戦闘を開始する。そこま
で感情移入する必要もないだろうに。

画面に敵機の姿が映る。うん。間違いなくボールだ。

「そこっ！」

先手必勝、と言わんばかりにビームライフルを撃つ。しかし、相
手はわずかに機体を逸らすことでこれを回避した。

「これは……ヤバいな」

思わずつぶやく。今の動きを見たとおりに、敵は中々の熟練者だ。
スペックが最低のボールであんなに素晴らしい回避ができるぐらい
なのだから。

「むきやー！　ちょこまかと鬱陶しいです！」

怒りのせいで冷静さを失った真冬がライフルを連射する。どこの
ファンネルだよ？　と思わずツツコミを入れたくなるぐらいの量だ
が、ボールはまたしても華麗に全てを避けていた。

『次はこっちの番だにゃ♪』

『あんま調子に乗るなよな……』

機械越しに、対戦相手の声が聞こえてくる。……あれ？　なんか
どっかで聞いたことあるような……。

俺がそんなことを考えていると、真冬の画面が赤く点滅し始めた。

「わわっ！　アラートです！　警報です！　やられちゃいます！」
「……………」

……うん。明らかに相手が悪かったな。スペックで劣るボールだが、その分機数がハンパなく多い。おそらく、ガンダムのご二倍はあるだろう。その上、さっきの操作技術だ。もう最強と言っても良いんじゃないか？ ……あ、真冬が負けた。

「いやあ、楽しかったにゃ♪ いい勝負だったにゃ、マフー」
「なんかすみませんね、紅葉先輩……」

満面の笑みと苦笑いで姿を現した対戦相手。
はあ、やっぱりコイツらか……。

「巽に葉露。何やってるんだこんなところで」

ため息をつきながら、二人————巽千歳と秋峰葉露に問いかける。大体予想は付くんだけどねえ……。

「レンレンの予想したので大方合ってると思うにゃ。ちーちゃん達は会長さんの指示で動いていたのにゃ！」

「……俺のことをそんな渾名で呼ぶのは海原だけと思ってたよ……」
「んにゃ？ ししょーがどうかしたかにゃ？」
「なんでもない」

なんかもう……精神的に疲れた。

俺は唯一話を通じるであろう葉露に状況を問うことにした。

「葉露よ。今回の作戦には全部で何人くらい参加してるんだ？」
「あ、えーとですね……2ーBの主要メンバーと3年メンバー、生徒会役員。後、なんか赤毛の綺麗な人もいたから……十人ぐらいですかね？」

「まだ半分以上待ち構えてやがるのか……」

おそらく、最後の葵グランドパークでほぼ全員が準備していると踏んでいい。

まったく……あいつらもホントに暇人だな……。

「あの、なんかスイマセン。せっかくのデートを邪魔しちゃって」
「ん？ ああ、別に構わないさ。お前と異のおかげで、真冬も楽しんでいたしな」

少し離れたところでゲーム談義に勤しんでいる二人に視線を向ける。

「あんなに楽しそうな真冬が見られたんだ。逆に感謝しているよ」

「……なんか、碧陽学園で唯一マトモな人ですよ、先輩」

「他のメンバーが特殊すぎるだけだろ？ お前だってマトモな部類に入るじゃねえか」

「……ありがとうございます」

コイツもいつか巽達に毒されていくんだろうな、なんて考えが頭をよぎったが、それを隅に押しやる。

そろそろ別の所に行こうと思っているのだが、真冬達は一向に話を終わる素振りを見せない。

「仕方ないな……葉露、このまま四人で一緒に飯でも食いにいこうぜ」

「え？ でも……」

「今更遠慮なんかすんなよ。それに、その方があいつも喜ぶだろうさ」

「……そうっすね。わかりました」

俺達はそれからしばらく二人と行動を共にし、昼飯を食い終えたところで別れた。

……さて、後は葵グランドパークですか。
なんか一番嫌な予感がするよ……。

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

感想、オリジナルキャラ及びストーリー、お待ちしております。

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

久しぶりです。いやー、学校って忙しいですね。ちなみに作者は明日からテストです（笑）

長くなったこの話もいよいよラスト。次回からは本編に戻りたいと思います。

さて、一つ宣伝をしましょう。

実は七月一日より、僕と他の四人のユーザーさんとで【運動会】というお題でリレー小説っぽいものを載せることになりました。まだ、題名とかは不明ですが、一日になったら【ルシフェル】さんのユーザーページに行くか、にじファンで【ROLAN】という作者名の一存小説を探してみてください。

一日から五日まででその作者名で連続投稿となっております。是非読んでくださいね。

さて、それではアクセス記念話、最終編をお楽しみください。

電車とバスに揺られること二時間。俺と真冬は葵グランドパークの前にいた。

この葵グランドパークは、有名企業である葵グループがとある都市伝説を作るために設立した遊園地だ。

その都市伝説とは――『この葵グランドパークを訪れたカップルは必ず幸せになる』というもの。

アルバイトで経営コンサルティングをしている姉さんの話によると、どうやら企業の力で無理やりにも結婚させようという目論見らしい。

そのための試験運用であり、そのためのプレオープンなのだ。

俺的にも、こんな物騒な遊園地から一刻も早く逃げ出したいのだが……。

「……はぁ……☆（キラキラ）」

隣でLED電球の如く目を輝かせている彼女を落胆させるわけにもいかない。

俺は、「はぁ……」とため息をつくとき、再び真冬の手を握り、入場ゲートへと向かう。プレオープンという限定的な期間である為か、特に待つこともなく係員の女性の前に進むことができた。

「い、いらっしやいませ！ 葵グランドパークへようこそ！」

その金髪の女は若干訛りの混じった口調で俺達に笑顔を振りまいていた。なぜだろうか、俺はその笑顔を某新聞部で見たことがある気がする。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」
「はい」

真冬がポシエットから例のチケットを取り出す。

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取って俺達の顔を見ると、微かにだが怪しい笑みを浮かべた。

「そのチケット、使えないんですか……？」

真冬がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる。

「イエイエ、そんなコトはナイデスよ？ デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」

係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺達に背を向けてどこかに電話をし始めた。

「……………私ですわ。ターゲットがいらっしゃいました。今すぐ作戦A『ウエディングシフト』の用意を。……はい、はい。了解ですわ」

「おいコラ藤堂。なんだその不穏当な会話は」

急に目の色を変えた係員……………藤堂リリシアに冷静にツツコム。まさかコイツまで参加してやがるとは……。

「ウエディングシフト？」

真冬が首を傾げている。企業の企みなどに一切関心のないコイツにはよく分からない単語だろう。

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

取り繕ったように元の雰囲気に戻る係員——藤堂。あからさまに怪しい。というか、いい加減正体を現せ、このゴシップ大好き女が。

しかし、こんな奴の行動にいちいちツツコンでいても埒が明かない。俺はとりあえず会話を続けた。

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

もはや潔いともいえるネーミングのおかげで向こうのやろうとしていることはよく分かった。だが、こんなものに乗る気はさらさらでない！俺はただ単純に遊園地を楽しみたいんだ！

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トツテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

「不要だ。とりあえずその帽子を取りやがれ、藤堂」

「藤堂なんて知りませーン。私の名前は……え、と……り、リンダマンデース！」

「誤魔化しにしては安直なネーミングだな、オイ」

「と、とにかく、断ればアナタに不幸が舞い降りマース」

「知るか」

「……………貴方と紅葉知弦の盗撮画像を使って学校新聞であることないこと書きますわよ？」

「よし。とりあえず話だけでも聞こうじゃないか、マドモアゼル？」

畜生……新聞部部長の権限をこんなところで濫用してくるとは……
下種が。

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「記念写真、ですか？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」
「先輩と……お似合い……うふふ」

真冬が藤堂（通称リンダマン）の言葉に仄かに頬を赤らめていた。

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深に被ったスタッフがカメラを片手に現れた。

うん？　なんだか見覚えのあるヤツだな。身長といい髪型といい……明らかに怪しい。

「アラ、アナタが持ってきてくれたクレたのですわね。ありがとう
ございますわ」

「……ふんっ」

……やはり妙だ。カメラマンのスタッフに対する態度が明らかに
おかしい。なんか嫌がっているように見える。

————ふむ。少し試してみるか。

「悪いがちょっと電話をさせてくれ」

「わかりまシタ」

携帯を取り出し、番号非通知で『桜野くりむ』という名のバカに
電話をかける。

P r r r r r r P r r r r r r

「あ、ごめん。私の携帯だわ」

すると、先ほどカメラを持ってきたスタッフの尻ポケットから電子音が響きだした。

ビンゴだ。

「……いよう桜野。テメエ、面白いことしてるじゃねえか……!」
「人違いよっ!」

ダッ!

「あっコラ! 逃げるなテメエ! ええい、離せこの腐れ新聞部!」
「彼女はココのスタッフのマイケル・ステファニー(四十五歳)、通称ジョニーでース。ナントカくりむさんではありませーん」

「黙れ! 人種性別年齢氏名全てに堂々と嘘をつくな! しかもどう考えてもその名前で通称ジョニーはないだろ! ついでに俺はくりむなんて名前は一言も言っていない!」

藤堂に絡まれている間に桜野の姿は見えなくなった。

あいつ……絶対何かする気だ……! 三度の飯よりバカ騒ぎが大好きなあゝの馬鹿会長ならやりかねん!

しかし、このスタッフになりすましているとなると、かなり大掛かりな話だ。おそらく、社長である桜野の親父がコネを利かせたのだろう。他にも協力者がいる可能性も高い。

「真冬、ちょっといいか?」

「はい。なんですか――ひゃっ」

真冬の首筋にチロリと舌を這わせる。

『……………っ?』

その瞬間、視界の隅で拳を握り込む二人組が目に入った。スタツフの制服ではなく、普通の私服を着ているようだが……。

「杉崎はともかく、なんで栗花落までここにいるんだ……?」

生徒会に所属している杉崎がここにいることは頷ける。しかし、なんでまた栗花落なんかがこんなところにいるんだろうか。というか、いいのか? 時間軸的に。

『(この作品は二次創作小説だし、今回は企画話だから、問題ないんだぜ!)』

へえ……………って、なんか変な電波が……。

「あのー、栗花落? どうしたんだ? なんか顔が真っ赤だけど……」

「蓮君の……」

「はい?」

「蓮君の、オタンコナス——————?」

「ええっ!? ちょっと、栗花落さ————ん!」

栗花落はただそう残して、全速力でその場から走り去っていった。慌てて杉崎が後を追っていく。

栗花落がいるのは予想外だったが、杉崎がいるのなら、深夏や二年B組のメンバーもどこかにいるのだろう。どいつもこいつも余計なことを……。

「れ、蓮先輩、いきなりすぎます……」

処刑法を考えていると、真冬が少し困ったような顔で俺を見ていた。

「あー、すまん。ちよつと野暮用でな。お詫びと言っちゃあなんだがお前の行きたいところに行っていていいぞ」

「……もう、先輩ったら」

ちよつとだけ機嫌の直った真冬が俺の手を取って歩き出す。

やれやれ、とりあえずはデートを楽しむとしよう。処刑はそれからだ。

適当に園内を歩き回っていると、二匹の猫っぽい着ぐるみが近寄ってきた。これは……ぬこか？ 謎の生物の。

『お兄さんたち、ぬこたんがとっても面白いアトラクションを紹介してあげるわよ？』

『そうそう。めっちゃおもしろえから行った方がいいぜ』

着ぐるみから聞こえてくる男女の声。ボイスチェンジャーなどは搭載していないのか、その声は普通の人間の声だった。……とか、聞き覚えのある声だ。気のせいか、二年B組の馬鹿二人に思えてならない。

こいつらも確認しておくか。

「そういえば、さっき杉崎と深夏が仲良く手をつないで観覧車の方に行っていたな」

『ええっ、杉崎が！？ ちよつと！ それはどこで見たのよ！』

『深夏が！？ くそっ、あの野郎！ 許さねえ……！』

本当にこいつらは揃いも揃って……。

「おいスペース姉弟。アルバイトか？」

『あ……っ！　ち、違うわよ！　私————じゃなくて、ぬこたんは星野巡だなんて可愛らしいアイドルじゃないわよ？　見ての通り愛くるしい動物だよっ♪』

それでも取り繕う巡はやっぱり芸能人なんだな、と思う。

『う、バレてんのか？　いや、そんなはずはない。俺達の変装は完璧だ。バレてるはずがないっ。……いらっしやいませ。俺の名前はぬこくんだぜ！』

こんなテンパリマスターの弟に比べたら何十倍も巡の方がメンタルが強い。

「じゃあ、ぬこの姉弟よ。そのおすすめのアトラクションとやらを教えてくださいるか？」

『ええ。私達のおすすめはアソコに見える特設クイズ会場だよ☆』

「そうか、ありがとな」

『いやいや、楽しんできてくれな！』

「ああ。真冬、クイズ会場以外の所に行くぞ」

真冬の背中を押して歩き出す。すると、二人が慌てたように俺の腕を掴んできた。

『ままま待ちなさいよ！　どうしてオススメ以外のところに行こうとするワケ！？』

「どうしてもへったくれもあるか！　お前達の口ぶりから察するにクイズ会場に余計な仕掛けが施されているのは明白だろうが！　わ

ガシャン、と椅子に座ると同時に腰から下が鎖によって縛り付けられる。くそっ、退路を断たれた！

《そこで、当葵グループとしてはそんなお二人を応援するための催しを企画させて頂きました！ 題して、【葵グランドパークウエディング体験】プレゼントクイズ〜！》

真冬がさつきとは違う意味で顔を輝かせている。まさかこいつ、ウエディング体験に惹かれたんじゃないだろうな……？

《本企画の内容はいたってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事三問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験して頂けるというものです！ もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが》

大問題だ馬鹿野郎。

《それでは、既にスタンバっているお二人に盛大な拍手を！ 紅葉蓮さん&真冬さんの高校生カップルで〜す！》

野次馬共の拍手によって会場のライトが点灯する。なんでこんなことに……。

「ウエディング体験……頑張ります！」

「落ち着け真冬。そういったものは双方の合意の下に痛い痛い痛い！ 鎖を引っ張るな！」

体の節々に金属の鎖が喰いこむ。ああ……なんか色んな意味で絶体絶命だわ。

《それでは、クイズを始めます!》

俺と真冬の間にある大きなボタン。これを押してから回答するというシステムのようだ。

く……ウエディング体験を回避したいというのが本音だが、真冬の希望を最優先してやるという約束をしてしまった以上、正解するしかない……。

《では、第一問!》

ボタンに手を伸ばす用意をし、出題を待つ。
さて、どんな問題が来る……?

《椎名真冬が好きな本のジャンルは?》
「……………」

おかしい。問題が予想外すぎる。
あまりにも唐突すぎる問題の内容にポカンとしていると、突如として解答ボタンのサイレンが響き渡った。……って、え!? 俺達は何もしてないんだが!?
慌てて音のした方を見る。そこには――――

「お、おいっ。いいのか? 僕達がこんなところにいて」
「もーまんたいだにゃ、ハロちん。これはかいちょーさん直々の依頼なのにな☆」

先ほど、ゲーセンであったばかりの葉露と異が対照的な表情で座っていた。

「葉露！　こんなところでなにしてやがる！」

「す、すいません。あれで出番は終わったと思っていたんですけど、会長から頼まれちゃって……」

ペコペコと頭を下げる葉露。畜生……こんなところにまでアイツの刺客が……。

予想外の事態に頭を悩ませている間に、解答権を手に入れていた巽は嬉しそうに答えた。

「びくえるっ♪」

《正解ですっ！》

「……………」

……なんだろ、この胸に燦る気持ちは。怒り？　怒りなのか？

自分の彼女のことを他人に知られていたことに対しての、嫉妬の怒りなのか？　……よし。

再び解答ボタンに手を伸ばす準備をする。こうなったら、全力であのチート娘を叩き潰す！

《では第二問！　じゃじゃん！》

《椎名真冬が最近好きな言葉は？》

「知るかボケ！」

ダン？　と解答台を殴りつける。なんなんだよこの問題は！　普通知るか？　好きな人の最近ハマッっている言葉なんて。知ってたらよっぽどの溺愛っぷりだな、おい！

巽がこちらを見て楽しそうに俺をおちよくってきた。

「へっへーん。レンレン、先に答えてもいいんだよ？」

「やめろそのドヤ顔。ってかなんでタメ口？　年下だよね？　お前

一応俺の二個下だよね？」

「ちーちゃんは自分より年上の【人間】にしか敬語は使わないんだにゃー」

「お前は俺をどういう風に見てんだよ！？ 人間！ 俺もれっきとした人間だから！」

「えー。レンレン、人間っていうのは普通、エヴァン○リオンを素手で倒せる人のことをいうんだよ？」

「お前の人間に対する認識はもはや使徒なのか！？ その条件に当てはまる奴なんていないだろ！」

「椎名深夏」

「ごめんなさい割と身近に存在してました」

「分かればいいのにゃ♪」

えっへん、と豊かすぎる胸を張る巽。なんか巽のペースに乗せられてるよな、俺。

とにかく、答えないことには何も始まらない。俺は勢いよく解答ボタンを押した。

《はい、挑戦者！》

司会者（よく見てみると薄野だった）に当てられ、俺は頭を掻きながら記憶を掘り起こしつつ、答えた。

「えーと、確か……『お前の全てを、俺が受け止めてやるぜ！』とかなんとか……」
『！』

司会者、巽及び観客の中の数十人の表情に緊張が走る。あいつら、もしかしくなくても一年C組か。

数秒の静寂の後、司会者がハッとしたように叫んだ。

《せ、正解！ 挑戦者、なんと正解です！ とんだノロケがいたもんだ！》

「ノロケとか言うな。俺はれっきとした一般高校生だ」

なにはともあれ、これで一対一。後ろの彼女も俺の身体に抱きつくようにして喜んでいる。ああ……背中に柔らかな感触が……。

『ちつくしう……許すまじ、紅葉蓮……』

『今すぐこの大福を奴の口の中へ……』

『待ちなさい、貴方たち。それよりもこっち（濃硫酸）を目に流し込んだ方が……』

観客席から何やら不穏な会話が聞こえてくる。やべえ、このままだと閻魔大王もドン引きするような惨殺死体になっちまう……。そんな俺の思考を他所に、隣の巽が楽しそうに笑っていた。

「おおー、流石レンレン、意外性あるにやあー！ ちーちゃん的に、マ○オのラスボスがク○パだったときぐらい、意外だったにやー」

「お前実は全然驚いてないだろう。想定範囲内だったろう」

「にやはは、レンレンは面白いにやあ」

「やめろ、そんな面白さはいらない」

巽とそんなやりとりをしていると、客席の方から、いつのまにか存在していた姉さんが声をかけてきた。

「流石蓮ね。私は、信じてたわよ。蓮は、ムツツリスケベのノロケ野郎だって！」

「そんな信頼はいらない！」

「だって蓮、なんだかんだ言って五本だけはHなDVD持ってるも

んね！ ゲームセ○ターCXのパッケージの中に紛れ込ませて！
ちょっと激しめな凌辱・痴漢系を！」

「こんなところで何言ってやがんだクソ姉貴！ 人の社会的立場とかを一気に壊してんじゃねえぞ！」

俺の必死な訴えの様子に、観客達がゲラゲラと笑う。葉露は仲間を見るような視線で俺を見つめ、巽は『そっか……レンレンはそういうのが好みなのじゃ。………よし』とよく分からない気合を入れていた。そして、我が彼女はというと……。

「先輩？ 今日帰ったら少し《説教》がありますんで、覚悟しておいてくださいね？」

「……………（コクン）」

背中に阿修羅像を掲げ、仁王立ちで俺を見下していた。俺にできることと言えば、大人しく頷くことぐらいである。

《では第三問！ 時間の都合上これを最終問題とさせていただきます。つまり、これに正解した方がクイズ大会の勝者となるわけです！》

司会者が声を張り上げる。なんかやっと終わる感がすごいのだが、随分ハードな日程だったな、結局。

まあ、とりあえずこれに正解してさっさとウエディング体験とやらを終わらせよう。

《それではいきましょう！ 第三問です！》

ボタン上にある右手に力を込める。さて、どんな問題が来るか――

『了解』

「げふっ！ オイコラ薄野！ 扱いが酷すぎ痛い痛い痛い！ 腕が腕がもげる！」

一年C組に連行され、俺は会場へと拉致られていった。

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！ 皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！》

園内全てに響き渡るのではないかと思えるほどの拍手が聞こえてきた。このうちの何割かは碧陽学園生徒というサクラだと思うが、周囲の熱気に圧されて一般入場客も拍手をしているようだ。

「紅葉蓮さん、どうぞ」

「あいよ」

本物のスタッフと思われる女に促され、トントンと小さな階段を昇る。そのままステージに上がると、その光景に一瞬眩暈がした。

「おいおい……。なんだよこのセット……」

数えきれないスポットライトにライブステージのような観客席。スモークの設備はおろかバルーンや花火の用意までしてあるように見える。向こうにある電飾なんていくらかかっているのか見当もつかない。

《それでは新郎のプロフィール紹介を————》

ん？ 俺のプロフィール紹介か。まるで本物の結婚式だな。おそらく今回の目的には随分と予算と人手がかかっていることだろう。姉さんや栗花落にでも聞いて細かく下調べを————

《————省略します》

手え抜きすぎだろコラ。

《————それでは、いよいよ新婦のご登場です》

心なしか音量のあがったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気がすべて消えた。スモークが足元に立ち込め、否応なしに霧囲気が盛り上がる。

……さて、真冬のウエディングドレス姿を楽しむとでもしますかね。

そんなことを考えながら待っていると、目が暗がり慣れるよりも早く、一条のスポットライトが点された。

《本イベントの主演、椎名真冬さんです！》

アナウンスと同時にさらに幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。暗闇から一転して輝きだす壇上で、思わず目を瞑ってしまう。

そして、再び目を開けた時に飛び込んできた姿に————俺は一瞬言葉を失った。

毎日顔を合わせているはずなのに今日初めてこの場で出会ったような、そんな感覚を抱かせるほどに見違えた姿。彼女は花嫁と呼ぶに相応しくたおやかに佇んでいる。あれは……誰だ？

『……………綺麗』

静まり返った会場から溜息と共に漏れ出た、誰のものともわからない台詞。だが、その言葉は何に阻まれることなく壇上の俺の所まで届いてきた。

余程入念に製作したのか、純白のドレスは皺一つ浮かべることなく着こなされている。彼女の元来の白い肌がドレスにとっても映えており、心臓が勢いよく音を立てている。スカートの裾は床に擦らない限界の長さに設定されてるようで、アイツがステージの中央まで歩いてくる間、一度も床に触れることはなかった。

「……………先輩……………」

ヴェールの下に素顔を隠し、シルクの衣装に身を包む後輩が、どこか不安げにこちらを見上げてくる。

胸元に掲げている小さなブーケが所在なげに揺れた。

「真冬、か……………」

「……………はい」

頭の中が真っ白になり、言わずもがなの質問が口をついて出た。あまりの変わりように、確認せずにはいられなかったのかもしれない。

動揺する俺に、真冬は恥ずかしげに問いかける。

「……どう、ですか……？ 真冬、お嫁さんに見えていますか……？」

コイツが見知らぬ少女に見えたせい、会場の雰囲気にも飲まれたのか、それとも他の要因か。俺は考えを巡らせることもなく勢いで返事してしまった。

「————ああ、大丈夫だ。似合っている、ぞ……」

あまりにも絶句しすぎて思うように口が動かない。もうすこし気の利いた感想でも言ってやればよかったな……。

「……蓮、先輩……」

真冬は小さな声で俺の名を呼び、ブーケを抱え直した。そして、その場で動きを止める。

「お、おい。真冬……？」

なんだ？ 様子がおかしい。俺の返事が何かマズかったか？ 駆け寄るべきか、一瞬迷う。すると、俺が迷っている間に、真冬は再び言葉を紡いだ。

「嬉しいです……」

目の前で少女が俯き、ブーケに顔を伏せる。そして、それ以上言葉を発することなく静かに震えだした。

《ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁が泣いているように見えますが……？》

仕事を思い出したように、アナウンスが入る。

泣いている？

言われてみて初めて気付く。真冬は……泣いていた。

「ずっと……夢だったんです」

《夢……ですか？》

「先輩に助けてもらったその日から、好きになったその日から。ずっと、ずっと夢だったんです。先輩の……お嫁さんになることが……」

「真冬……」

真冬が静かに顔をあげる。涙で軽く目が腫れていたが、真冬はニコリと笑った。

《どうやら、嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方の方です。花婿も本当に幸せな方ですね》

アナウンスと同時に客席から大量の拍手が送られる。今、この場にいる全員が俺達を祝福しているかのようにだった。

《それでは、お二人様、司祭の前にお進みください》

「真冬、ほら」

「……え？」

「え？ じゃなくてさ。さっさと行こうぜ。後は誓いのキスだけだろ？」

「あ、はい……でも、先輩は……」

真冬が申し訳なさそうに目を伏せる。大方、俺が体験を嫌がっていたことでも思い出したのだろう。

俺はヴェールが取れないように力を調整しながら真冬の頭を撫でた。

「確かに最初は嫌だったけどさ、今日一日お前とデートして、やっぱり体験でも一度は経験しておいた方がいいかなって思ったんだ。

……ほら、本番の時にテンパっても、困るだろ？」

「先輩……それって……!」

「そういうことだ。分かったら、早く手を繋げよ。皆が待ってる」

「……はい!」

真冬が満面の笑みで俺の手を取る。俺達は二人で足並みを合わせて司祭の前まで進んだ。

「二人共、お似合いですよ」

「今まで顔を見なかったかと思えばこんなところにいたか、中目黒」

付け髭と司祭服に身を包んでいたのは栗花落と同じ事情により今この場にいる、中目黒善樹だった。

……まあ、男女平等とかそういうのに関してはコイツが適任っちゃあ適任だけだな。

「椎名真冬、汝はこれから先どんなことがあっても花婿と手を取り合い助け合って生涯の苦楽を共にすることを誓いますか？」

「……誓います」

真冬がやや頬を朱に染め、言った。

……さて、俺の番か……。

中目黒がこちらに微笑みかけてくる。けっ、そんな目で見なくてもちゃんとやるつつうの。

「紅葉蓮、汝はこれから先どんなことがあっても花嫁と手を取り合
い助け合って生涯の苦楽を共にすることを誓いますか？」

「……ああ、誓う」

言ってから、気付いた。

うわ、心臓がやけにバクバクしてるし顔もなんか熱いし体も緊張
で固まってうわああああああああ。

そんな俺の混乱も他所に、ウエディング体験は遂にクライマックス
を迎えようとしていた。

「それでは、二人共、お互いの方を向いてください」

「……ぷっ」

「……ふふっ」

顔を見た途端、思わずお互いに吹き出してしまった。なんだ、あ
いつもなんだかんだ言って緊張してんじゃねえか。顔がガチガチだ
っての。

そして、その時が来た。

「では、誓いのキスを」

ドクン、と心臓が跳ねる。真冬と付き合い始めてから二週間。な
んとも恥ずかしい話だが俺はコイツと口はおるか頬にさえキスをし
ていない。

つまり、ファーストキス。

いや、中学時代の姉さんのアレとかでキスはしたことあるけどさ

！ それは回数としてカウントしちゃだめだろ！？ だって肉親なんだし！ 姉弟なんだし！ 一向に鳴りやむ様子のない心臓にドギマギしつつ、真冬の顔を見る。

[.....]

真冬は既に目を閉じていた。
顔が赤いのは相変わらずだったが、俺よりは随分と落ち着いてい
る。

……落ち着け、俺。

大きく一回深呼吸。すーはー……よし。

左手で真冬の肩を押さえ、右手で顎を軽く持ち上げる。わずかに
屈むようにして、俺は顔を近づけた。

ピト、と唇に柔らかい感触が触れる。

五秒ほど続けたところで、俺はバツと顔を離れた。

『ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ?
??.??.?』

その瞬間、観客席から割れんばかりの歓声があがった。腕を突き上げ、拍手を送り、優しくこちらを見ている。

俺は恥ずかしさで真つ赤に染まっている真冬の背中と膝裏に手を入れ、持ち上げた。いわゆるお姫様抱っこという奴である。

「せ、先輩!？」

「黙ってろ」

真冬を担いだまま、花吹雪の飛び交う中を出口に向かって走り出

す。

これから先の展開なんて火を見るより明らかだからだ。

『あ……紅葉蓮に正義の鉄槌を————？』

『イヤッハア——————————ッ？？？？』

黒装束に身を包んだ変態共（一年C組）がそれぞれの手に凶器を持ち、追いかけてくる。

「やったわね、蓮！」

「蓮さんカッケ————！！」

「真冬ちゃん、おめでとう！」

「姉として誇りよ、ムッツリ！」

その後ろから駆けてくる生徒会役員共。ネタではない約一名、不名誉な呼び方をしたバカ姉がいるが、今回は許しておいてやろう。

後にくように、宇宙姉弟、中目黒、俊哉、藤堂、栗花落、要、海原、葉露、異が走ってくる。

俺はそいつらを振り返り、全力で叫んでやった。

「みんな！ 今日ありがとうな————————？。」

私立碧陽学園生徒。

それは、皆が楽しく幸せである人達のことである。

【アクセス数70000、ユニーク数10000突破記念!!】デートする生徒

アクセス数十万突破！

これまで読んでくれていた方々、本当にありがとうございます！
皆様のご期待を裏切らないよう、これからも精進していこうと思
っておりますので、どうかこの作品をよろしく願います。

あ、久しぶりにお知らせを。

先日より行っている、オリジナルキャラクター及びオリジナルス
トーリーのリクエストは今でもお待ちしております。

自分の考えたキャラを出してほしい、自分の作った話を書いてほ
しい、という方はどしどしご応募くださいね！

今まで送ってくれた方々、只今鋭意執筆中ですので、今しばらく
お待ちください！

それではまた次回お会いしましょう。普通の感想も待ってます。

さよ～なら～♪

存在しないプロローグ（前書き）

こんにちは。今回は昨日も申し上げたりレー小説についてです。
詳しくは前話のまえがきあとがきを見てください。

僕の当番は七月五日、つまりは最終日なのですが、ここでお知らせです。

本編よりも先に、そちらの方で募集キャラを出したいと思います！

そして、その後本編で活躍させていく予定です。

ということで、オリキャラを思いついた人は早めにご応募おねがいしますね♪

存在しないプロローグ

○《スタッフ》への通達

近頃、諸君らの干渉成果に関して、《企業》の上層部から疑問の聲が上がりに始めている。

仕事の性質上、明確な数字として諸君らの功績は測れるものではない。しかし、今期はあまりに《企業》への貢献が見られない。

《ヒューマン・フィードバック・システム》の異変を指摘する声もあるにはあるが、活動状況を鑑みるに、その可能性は極めて低い。つまり、言い訳はきかないということだ。

そのため、《スタッフ》の諸君らには、今一度危機感を持って、このプロジェクトにあたってもらいたい。

《学園》の空気に当てられ、気が緩んではいなかったか？

マニュアルに頼りすぎ、柔軟な対応を忘れていなかったか？

自分達の立場や権力を、過信しすぎてはいなかったか？

子供を侮るな。

諸君らの能力は確かに高い。この日本に君ら以上に人心を掌握する術に長けた精鋭は存在しないだろう。

しかし、この年代の未熟な子供の心を完全に把握するというのは、優秀な君らだからこそ難しい部分もあるのではなからうか。

そして。

だからこそ、時に、あの生徒会に後れを取るのではなからうか。

そこで《企業》は、この度、新たな打開策を導入することを決定した。

その打開策とは――――

存在しないプロローグ（後書き）

感想、キャラ、ストーリー、お待ちしております。

第一話 反省する生徒会？（前書き）

お久しぶりです。高校ってホント忙しいですね（笑）
さて、やっとこここの小説も第二巻に突入しました。
これからもなんとか頑張っていきたいと思いますので、応援よろしくお願いします。

それでは、どうぞ♪

第一話 反省する生徒会？

「過去の失敗を糧にしてこそ、我々は前に進めるのよ！」

桜野がいつものように小さな胸を張って何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

ホワイトボードには既に今日のテーマが書かれている。俺達のを承も得ていないのに。

《第一回 生徒会大反省会》

どうやら今日も俺や杉崎にとって面白くない方向に話題が行きそうだが、既に桜野がやる気満々なので、軌道修正は期待できそうにない。

しかし、俺に変わって深夏が「えー」と不満の声を上げた。

「反省たって、まだ二か月ほどこしか活動してないじゃねえかー」

「深夏！ 貴女は去年から活動しているでしょうがっ！」

「い、いや、でも、今日のは『現生徒会』ということだろう？ だつたら……」

深夏があらさまに嫌がる素振りを見せる。

去年の生徒会にも所属していた深夏は、その熱狂的な雰囲気も相成って桜野や姉さんにもタメ口で話すようになっていた。そんな反動のせいかな今年の彼女はかなり真面目な会議を嫌う傾向にあるのだ。だから今回のような反省会なんて議題はもってのほかだろう。

深夏の不満顔に、桜野がバンツと机に手を置いて叩きつける。

「そういう生ぬるい考えが現生徒会を墮落させているのよ！」

「いや、八割以上お前の怠惰のせいだろうが」

「何言っているのよ、蓮！ 私のような可憐で真面目で気丈な生徒会長のどこに怠惰なんて要素があるっていうの！」

「駄弁ったり怪談について話し合ったりカードゲームに興じたりとか全部だよ！」

「……ふっ、素晴らしい生徒会長ほど妬みの言葉を受けるといふことね」

「滝のように汗かいてますよ、会長」

見れば桜野の顔にはびっしりと大量の汗が流れている。どうやら自覚はあるらしい。

桜野は再び俺を見ると、またもやバンツと机を叩いた。……この行動、本人は『強く威圧的に』叩いているつもりだろうが、実際には子供が駄々をこねているようにしか見えない。いいのか、こんな高校三年生で。

「杉崎や蓮なんて反省点だらけじゃない！ むしろ、反省点以外見当たらないじゃない！」

「俺達的人格全否定っすか」

「え？ どこか肯定するところあるの？」

「すっげえ純粋に首を傾げるな！ 俺達にだって良いところはあるつつうの！ なぁみんな！」

生徒会の他メンバーに尋ねてみる。すると、全員が「むう」と唸り神妙な空気になった挙句、さっきまで会長に反対していたはずの深夏がぽつりと呟いた。

「反省会……すべきかもしれねえな」

「うおおい！ なんだその急激な方向転換！」

「真冬も……杉崎先輩達を見ていると、早急に反省会を開催する必

要性を感じました」

「真冬！ お前本当に俺のこと好きなのか！？ 彼氏に対して言うべき台詞じゃねえだろう！」

「キー君と蓮は反省するために生まれて来たような子よね」

「そんな目的で生まれる悲しい子供がいてたまりますかっ！」

「姉さん！ 実の弟に向かってなんでそんなことを言うのさ！ 俺は今家族の愛について深く話し合いたいんだけど！？」

まずい。これは前回の更生云々と似た流れだ。俺達にとってマズイ方向だ、しかし……もう、反省会の開催はほぼ確定。こうなったら……。

杉崎と顔を見合わせる。そしてコクンと頷くと俺達は最後の手段に出た。

「ああ、俺達は反省点だらけさ！」

「杉崎の言うとおり！ 反省点なんて挙げていけばキリがない！」

開き直り。これには桜野も意表を突かれたようだ。目をぱちくりさせている。

「しかし、そんなことは俺達が生まれてきた時からの、今更言うまでもない現実！ だからこそ、俺達に反省を促すことほど無駄な時間はありません！」

「だったら、今日は俺達以外のメンバーが反省するべきだ！」

「う……なんか説得力あるわね。自分達を全否定しているくせに」

桜野が俺達に気圧されていた。姉さんや椎名姉妹も、空気に飲まれている。

俺達はこの好機を逃さず、さっさと会議を進めてしまうことにした。そう、マスターオブセレモニー……司会者たる立ち位置さえ奪

ってしまえば、話の流れは俺達が支配したも同然！

「ということで桜野！ 最高責任者であるお前が率先して反省すべきだ！」

「うっ！」

俺がビシッと指差すと桜野は大きくのけ反った。同時に、他メンバー達にも「確かに……」という空気が流れる。

俺ははっきりと自分に主導権が握られたことを実感しつつ、さらに会議を進めた。

「そんじゃ桜野。お前が自分で反省しなきゃいけないと思う所を挙げてみてくれ」

「わ、私の反省点？」

桜野が腕を組んで考え込む。……こんなことをいうのもなんだが、今ふと思いついただけで、桜野の反省点はざっと百は超える。今回はこの議題だけで乗り切れそうなほどだ。

他のメンバーもひたすらのほーんと同じことを考えているようだ。

そうして、五分ほど熟考した桜野は、腕を組み踏ん返り返って言った。

「ないわね」

……… 鞆から三角定規とコンパスを射出、装填………完了。発射準備整いました。

「どこまで自分に甘えんだこのヤロォ————ッ？」
「うわっ！ 蓮がキレた！ って、危ない！ 文房具とかホントに

危険だから？ うわーん！ 助けて杉崎い？」

桜野が杉崎の陰に隠れる。俺は額に怒りマークを浮かべながら次弾の装填を行っていた。杉崎含め他メンバーの額にも、明らかに血管が浮かび上がっている。

皆の様子を見て「あ、あれ？」と首を傾げる桜野。

「えと……なんか皆怒ってる？ どうして？ あ、ああ、私があまりにも完璧人間過ぎてちよつと嫉妬しちゃったのかなあ？ ごめんね、やっぱり会長に選ばれるくらいだから、私って、欠点無いんだよねー」

《ビキ、ビキ、ビキ、ビキ》

生徒会室に怒りのオーラが充満する。……オッケエ、桜野、お前がそうやって自分の非を全く認めねえなら、こっちにだって考えがあらあ……。

役員全員で、アイコンタクト会議開始。

（みんな、どうする？）

（どうするって……やるしかないでしょう？）

（真冬も、会長さんにはそろそろお灸を据えるべきだと思いますっ）

（俺だってそうですよ！ さっきの恨みを今ここで……！）

（なんか楽しくなってきたなっ♪ 燃えてきたぜ！）

一人ほどなんか違うテンションのツインテ少女がいた気がするが、やることは決まった。

役員全員で桜野を取り囲む。一見か弱いロリッ娘を集団で虐めているように見えるが、これは大人による教育なのだ？

準備ができたことを確認したところで、俺達は桜野に向けて、声をそろえて言い放った。

『そこに正座アアアアアアアアアアアアアアアアア?』

第一話 反省する生徒会？（後書き）

さて、いかがでしたか？

今回は原作で割と好きな話です。だから、全力でエンジョイしてきましたと思いますよっ！

オリキャラとオリストーリーの募集はまだまだ行っています。あなたの考えた愉快なキャラやストーリーを是非送ってくださいね。

今までに応募してくれた方々、只今鋭意製作中です。こんな序盤だとなかなか出しにくいというのが本音だったりしますがorz
それではまた次回お会いしましょう。

感想もお待ちしておりますね☆

第一話 反省する生徒会？（前書き）

こんにちは。

遂に明日から後期補習が開始します。なので、更新は少し滞るかもです。ご了承ください。

それでは、お楽しみください♪

第一話 反省する生徒会？

『そこに正座アアアアアアアアアアアアアアアア？』

「は、はいいいいいい？」

俺達の怒声に思わずといった様子で椅子の上にちよこんと正座する桜野。床にしないのが少し勘に障ったが、まあそれくらいは見逃してやるでしょう。

俺達は桜野を見下しながら、教育という名の説教を始めた。

「いいですか、会長」

「え、ええ……」

「返事は『はい』だろうが、桜野！」

「は、はいいいっ！」

パンツと机を叩き威嚇する俺に怯えながらも言葉づかいを直す桜野。まったく……教育がなつとらんな！

「……蓮さんって時々滅茶苦茶怖えよな」

「明らかに紅葉家の血だね。先輩が紅葉だって痛いほど分かる光景だよ……」

「あら、失礼ね二人とも。あの子は私よりも更にドSよ？」

「……お前達から先に教育してやろうか？」

額に怒りマークを浮かべつつ笑顔で三人の方を向く俺。瞬間、彼女達はオオカミに睨まれた子羊のようにビクビクと怯え始め、部屋の隅へと逃げて行ってしまった。……ちっ、いい機会だと思ったのによ。

「蓮さん、絶対変なスイッチ入ってますよね？」

「何を言っているんだ杉崎。俺はあくまでもイツモドリダゼ……？」

「うん、怒りのあまりおかしくなったのは分かりましたからとりあえず黙っとけこの野郎。話がややこしくなる」

「……………はい」

ガチギレしながら手にカッターナイフを持った後輩には流石に逆らえなかった。仕方がないので自分の席に座って様子を見守ることにする。

「いいですか、会長」

「は、はい……」

再び説教を仕切り直す杉崎。桜野は俺の教育的指導やつあたりもあってか、すっかり素直に従順な優等生へと変貌(?)していた。

杉崎が桜野を見下ろしながら言葉が続ける。

「過去の失敗を糧にしてこそ、我々は前に進めるのです」

「そ、それ、私の名言————」

「だまらっしゃい！」

「ひう」

杉崎の突然の怒声に縮こまる桜野。今のは名言をパクった杉崎が悪いと思うのだが、俺もまだ命を落としたくはないためあえて黙っておくことにした。

「かの偉人、聖徳太子は言いました。『人間、反省なくして月9出演はありえない』と」

なんてアバウティな聖徳太子なんだ。

桜野も俺と同じことを思ったようで、冷や汗をかきながらも抵抗を始めようとした。

「絶対言っていないと思うけど……」

「だまらっしゃい！」

「ひい」

全否定された。

もはや桜野が反抗することなど、現代の政府が日本を統一するくらい不可能に等しいだろう。

杉崎は更に言葉を続ける。

「時代考証なんてどうでもいんだ！ 要は『反省しろ』ってことなんですよ？」

「じゃあ最初からそう言おうよ……」

「とにかく！ 会長は反省すべきです！ 反省なくして会長の未来はありません」

「そ、そこまで言われるほど酷いのかな……私」

「酷い！」

「言い切った！」

「うう」と軽く肩を落とし落ち込む桜野。ああ、なんか桜野が可哀想になってきた。止めないけど。

隅に避難している三人も桜野のことを複雑そうに見ている。杉崎は桜野の様子を気にながらも、説教を再開した。

「オリオン調べの『反省すべき生徒ランキング、三年連続堂々の一位です！』」

「オ○コン、そんなことまで調べているの！？」

「杉崎鍵の中の『抱きたいロリ美少女ランキング』でもダントツで一位ですが」

「その情報は聞きたくなかった！」

「そんなわけで、会長は反省すべきなのです！ 性的な意味でも！」

「性的な意味でも!？」

「まあ、そこらの教育というか調教は後に回しますが……」

「私の未来真っ暗！ 反省しても私の未来はないじゃない！」

「それは違うぞ桜野。杉崎の肉奴隷になるっていう吐き気のするような未来があるじゃないか」

「急に口を開いたかと思ったら私への追い討ちか！ 蓮はいいの！？ 親友がそんな目にあっても黙認できるの!？」

「まあ……桜野が望んでそうなるのなら、止める意義もないしな。どうぞお幸せに、って感じだ」

「今の会話の流れからどうやってたら私自信が望んでいるようにとれるのよ！ あなた絶対楽しんでいるでしょう!？」

「もちろん」

「楽しむなああああああああああ？」

目の端に涙をためて絶叫する桜野。それを横目で見ながらも、杉崎は真冬に説教をバトンタッチしていた。

真冬が桜野の正面に歩み寄る。

「会長さん、準備はよろしいですか？」

「そもそも何の準備をすればいいのかわかりたいくらいよ……」

「ええと、まずはですね……」

「私の話は全無視なのね」

「会長さんは、もうちょっと考えてから行動した方がいいと真冬は思います」

「うぐっ！」

いきなり直球ストレート。さすがは真冬、口撃力がハンパない。

「なんていうか、会長さんの行動ってほぼ思い付きというか、思いついて二秒後には口に出している印象なんですよね……」

「うぐぐ……」

「かの偉人、エジソンは言いましたよ。『ボスを倒しに行くなら、充分レベルを上げてからにしろ』と」

「や、だから絶対言っていないと……」

「そう言う問題じゃないんです！ 要は、なにかするなら、ちゃんと準備しなさいってことなのです！」

「だから、それならそうと……。杉崎といい、偉人の名言捏造はなぜ必要なの……」

「会長さん！ ツツコミばかりしてないで、ちゃんと反省してください！」

「ツツコミを必要とする発言をする方にも問題があると思うのだけれど！」

「会長さん……。真冬は失望しました。そんなにツツコミが必要ですか」

「重要だよ！ 流したら、完全にカオスじゃない！ わけが分からないじゃない！」

「わけがわからないのは貴女です、会長さん！」

「絶対杉崎とか真冬ちゃんよ！」

「ついには責任転嫁ですか……」

「移動してないわよ！ あるべきところに責任を求めているだけよ！」

「そうやって大人の勝手な事情を主張するから、世界はダメになっていくんだぞ、桜野！」

「だから蓮はどうしていきなり発言する上に私を責めるわけ！？ っていうか、あんた私と同一年でしょうが！」

「やれやれ、こりゃもう救いようがないな」

「あなたがね！」

「もういいです。真冬からはもう、何も言えることはありません……」

そう呟いて、嘆息しながら真冬が席に着く。桜野が何か喚いていたが、俺達は一切気にすることはなかった。まったく……これだからお子様は。

「や、だから、なんなのこの空気！？ 私、割とマトモな発言してるわよね！？」

『……………』

「……なんかこの生徒会、たまに私を拒絶するわよね……」

「桜野」

「ん？ どうしたのよ、蓮？」

「……………フツ」

「何今の意味不明なリアクション！ ただムカツクだけなんだけど……」

「……………ハッ」

「むきやあああああああああああああああ？」

俺の弄りに桜野が髪を振り乱しながら絶叫する。ああ……幸せだ……。

「ほら、見ろよ深夏。蓮さんのあの恍惚な顔を」

「ああ、いつも会長さんを虐めているときの知弦さんの顔だな」

「……私っていつもあんな怖い顔しているの？」

「自覚なかったんですね、紅葉先輩……」

隅っこで何か不名誉な会話が繰り広げられていたが、今はそんなことに構っている余裕はない。

俺は深夏に手招きすると、桜野の説教を任せた。

「んじゃ、頼んだぞ、深夏」

「おう！ 任せとけよ、蓮さん！ あたしが絶対に会長を改心させてみせるぜ！」

「今思ったのだけれど、これ、イジメじゃないかしら？ 生徒会室で、今、イジメが発生しているんじゃないかしら」

「黙れ会長！ そういう『自分以外が全部悪い』みたいな荒んだ精神が駄目なんだぞ！」

「う……って、危うく反省しそうになったけど、今のはやっぱり私が正義なような……」

「黙れこの腐れ会長め！ ケツ！」

「いくらなんでも酷いわよ！ っていうか、いよいよ先輩に対する態度じゃないわよそれ！ 深夏！」

「うるせえ！ 反省しない先輩なんて、もう先輩失格なんだ！ 留年どころか、降年すべきなんだよ！」

「なにその新システム！ 怖いわ！ 降年、怖いわ！」

「そうなりたくなければ反省しろっ！」

「う、うう……」

桜野が肩を落として嘆く。しかしまだまだ深夏の教育的指導は終わる様子を一向に見せなかった。

第一話 反省する生徒会？（後書き）

感想、オリキャラ、オリストーリー、お待ちしています♪

第一話 反省する生徒会？（前書き）

こんにちは。

10月20日に『生徒会の金蘭』が発売となるそうです。今から楽しみです♪

さて、それでは続きをば。なんか長くなってしまっていますが、できるだけ早く次の話に行きたいと思っていますので、これからよろしく願います。

それでは、お楽しみください。

第一話 反省する生徒会？

桜野の嘆きを華麗にスルーして、深夏がこほんと咳払いをし、仕切り直す。

「あたしが会長さんに反省を求める点は、まず、その軟弱なお子様容姿だ」

「いきなり理不尽なっ！ 容姿から入るなんてっ！」

「肉食べろ、肉！ もっとムキムキと屈強な体格を目指せ！ 生徒会長だろ！」

「会長になったら女を捨てなきゃいけないの！？」

「女にだってボディビルダーはいるんだぞ！」

「会長がそうなる必要性はまるで感じないけどねえ！」

「それなら今からこの『深夏ズ・ブートキャンプ』をやってみるか？ 姉さんはこれを使って一週間で七キロ痩せ————」

「蓮、ちよつとこっちに来なさい」

「え、ちょ、姉さんその手に持った蝋燭と鞭で俺に何をする気？ というかそこにある三角木馬は何ってギャ——————————（自主規制）」

「なんか急に現れたと思ったらすぐに知弦に連れていかれたあのバカはさつきから一体何がしたいのよ……」

「あふう……なんだか懐かしい感覚だった……」

「アンタはホント変態の極みよね」

息も絶え絶えに言う俺を、桜野が見下しながら侮蔑の言葉を送ってくる。く……中学生時代の姉さんとの《検閲削除》の記憶が蘇ってきたぜ……。

深夏そっちのけの展開に堪忍袋の緒が切れたのか、深夏は自慢のツインテールが天に突き上がらんかの勢いで桜野に迫った。

「コラ！話を逸らすなよ会長さん！」

「今のはどう考えても蓮のせいでしょう！？キレルならこの変態にキレなさいよ！」

「まったく、相変わらずの責任転嫁だな。話を戻すぞ」

「もうどうだっていいわよ……」

「いいか、よく聞け会長さん。かの偉人、楊貴妃はこう言った。『女たるもの、プロテインとジム通いは欠かしてはいけないぜえっ！』と」

「絶対言っていない上に、楊貴妃のキャラまでおかしい気が……」

「黙れ！アンタはツツコミしかすることがねえのかっ！」

「誰かさん達がボケまくるせいでねえ！」

「やれやれ……こりゃ駄目だ。救いようがねえ」

そう言うのと深夏は満足そうに着席した。すっげえイイ顔してるぞ、お前。

ちなみに、桜野は「だからなんなのこの空気！アウエーだわ！生徒会長なのに、生徒会室がとてモアウエーだわ！」とまたわけのわからないことを喚いていたが……まあ無視だ。

全く反省のそぶりを見せない桜野。……ふう、ついに俺達の出番か。

「……出たな、真打」

「ある意味俺達の中で一番危険な二人なんだが」

「真冬、ちよっと出て行っていいでしょうか……」

「貴方達、ホント私達をどう思っているわけ？」

「俺達はあるまで普通の人間なんだからな？」

『……………（じー）』

「な、なんだよその目は……」

ま、まあいいや。

姉さんはサラリと自慢の長い髪を掻き上げて、スツと冷たく目を細めて、桜野を睨みつけた。

「アカちゃん……貴女には失望したわ」

「ち、知弦まで……」

「桜野、幼児体型はごく一部にしか需要無いぞ？」

「蓮は一体何の話をしているわけ！？ そんな情報必要ないわ！」

「……かの偉人……そう、ベジ〇タはよくこう叫んだものよ」

「私の話全無視な上に全員が全員偉人の名言捏造するのね……あれ？ ベジ〇は偉人じゃないような……」

「『カ〇ロットオオ！』と」

「だからなに！」

「つまりアカちゃんは自分の行動をよく省みて、この生徒会及び学校を、よりよい未来へと導くという意味よ」

「『カカ〇ットオオ！』にそんなに深い意味は絶対ないよ！」

「ちなみに、ベ〇ータはこうも言っているぞ。『避けるナ〇パ！』」

「あんた達さつきから何なのよ！ ていうか、絶対それに意味はないわよね！」

「無理なことに挑もうとせず自分にやれることを精一杯全力で行えという意味だ」

「完璧に口から出まかせじゃない！ 今咄嗟に作ったでしょうが！」

「遂には〇ジータ否定ですか……」

「ベジ〇はいいよ別に！ 彼を否定はしないよ！」

「まさかラ〇イツツ派なのかしら」

「いや、もしかしたらギ〇ユ―派かもしれないよ？」

「何派でもないよ！ 特定のサ〇ヤ人に思い入れは全くないよ！」

「ナ〇ツク星人萌えとは、またマニアックな……」

「ピッコ〇は神様の分身みたいなもんだぞ」

「何の話題！？ これ、何の話題！？」

『鳥○明は天才だということを語るんでしょ?』

「違うわよ! 二人そろって変なこと言わないで! 今日の議題は反省会よ!」

「ああ、確かにGTは蛇足という見方もあるわね。しかしあれはあれで……」

「GTは『ごめんなさい鳥○先生』の略という説が有効だ」

「ドラ○ンボ○ルの反省じゃないよ! っていうか何様!？」

「あら。仕方ないわね……。そんなにジャ○プネタが嫌なら、サ○デーにする?」

「『ハ○テのごとく!』について熱く語ろうじゃねえか」

「少年漫画はもういいよ! 今は————」

『今は?』

……かかった。

俺達がこっそりほくそ笑む中、次の瞬間、ついに桜野は禁断の一言を発してしまった。

「私の反省点を語りなさいよ!」

『了解』

「あ」

ニヤリと姉さんが怪しく笑う。桜野はゾンビもビックリなほど真っ青な表情をしていた。

……相変わらず単純な奴だなあ。

「怖い、蓮さんと知弦さんのコンビがただ純粹に怖い」

「あたし、絶対今度からあの二人を敵に回さないようにしよう」

「真冬も、これからは言動に気を付けます」

「そのまま空気になって口を開くな、無礼者どもが」

目立たなくせに生意気な！

……まあ、あいつらに構っても仕方がない。今からは楽しい楽しい桜野弄りタイムなのだからなあっ！

第一話 反省する生徒会？（後書き）

感想、お待ちしております♪

第一話 反省する生徒会？（前書き）

こんにちは。

早く生徒会の新アニメ情報が出ないかな、と心待ちにしている、ふゆいです。

今回は相変わらずの原作ブレイクな終わり方ですね。楽しんでくれると幸いです。

それでは、どうぞ♪

第一話 反省する生徒会？

「さてアカちゃん。自分でその話題を求めたからには、真摯に受け止める覚悟はできていると見ていいのかしら？」

「う、うう……」

「いいのかしら？」

「い、いいです……」

桜野が完全におびえた様子で姉さんの問いに答える。まったく、なんで桜野はあんなに俺達の嗜虐心を擦るような反応をするのかねえ……。

姉さんはそれを聞いて満足そうに「はふう」と溜息をつくど、なんとも嬉しそうに桜野の反省点について語り始めた。

「まずアカちゃん」

「はい……」

「もうちょっと体にメリハリが欲しいわ」

「やっぱり理不尽よおおおおおおおおおおお？」

桜野が机に突っ伏しておいおいと泣き崩れてしまった。だ、ダメじゃないか姉さん！こんなに序盤から桜野を泣かせちゃ！これだと――――

「俺が桜野を泣かすタイミングがなくなっちゃったじゃないか！」
「あんたらは姉弟揃って変態か！なんでそんなに私を陥れようとするワケ！？」

「ええー？　そんなのおー……ただの趣味っていうかあ……」

「唐突なギャル言葉！？　ってか蓮みたいな男がそんな喋り方する
とただキモいだけなんですか！？」

「紅葉☆蓮」

「なにが！？」

息つく間もなく俺にツッコミを入れ続ける桜野。ふふふふ……
これで俺も桜野を泣かせることができるぜえ……。

「私の趣味的にはその幼児体型も好きなのだけね。生徒会長
らしい、という観点から見ると、どうしても威圧感に欠けるわよね」
「私にどうしろと……ていうか、今さらって何かトンデモないこと
をカミングアウトされたような……」

「牛乳を飲むのよ、アカちゃん。そして転倒して顔から派手に浴び
てしまい、カラーイラストになるのよ」

「どさくさに紛れて、なんで妙にエロティックな絵を作ろうとして
いるのよ！？」

「ほら、キー君なんてどこからか牛乳を用意して凄くキラキラした
目でこっちを見ているし、蓮にいたっては備品のビデオカメラで撮
影準備OKだわ」

「男どもはそういうことになる仕事早いよねえ！」

そういうと桜野は目にも止まらぬ速さで既にスタンバっていた杉
崎の手から牛乳を奪い取ると、すかさず俺が持っていたビデオカメ
ラにドボドボとかけてしまった。……って、ああー！　カメラがあ
ー！

「あらあら、アカちゃん。そんなことしたら……ほら、キー君泣い
ちやっただじゃない」

「男の涙軽いわね！」

「蓮にいたっては真冬ちゃんの膝に蹲って子供みたいに泣きじゃく

っているわよ？」

「あんたはホント何歳なのよ！」

桜野がギャーギャーとなにか騒いでいるが、そんなのは無視。今の俺はマフユミン摂取で忙しいのだからな！

「うう、真冬う……桜野が俺のこと虐めるよう。俺と杉崎のささやかな願いも叶えてくれないよう」

「よしよし。いい子ですから泣き止みましょうねー。その願いは後で真冬が先輩に個人的にしてあげますから。とりあえず今は元気出してくださいねー」

「ま、真冬ー！」

「はいはい。いくらでも甘えていいですからねー（ああ、幸せですう……）」

「真冬ちゃん蓮に甘すぎだよねえ！ 既にソイツへのジャッジが無罪一択しか残されてないよねえ！」

「む。うるさいですよ会長さん。今は真冬が先輩とイチヤイチャしているのですから、会長さんは大人しく紅葉先輩に弄られてください」

「それは会長としては全力で止めるべきだと思うのだけれど！ 後真冬ちゃん今しれっと私を売ったわね！？」

桜野は母親のようにガーガーと喚きながら俺と真冬を離れさせる。ちっ、まあとにかく元気も出たところで桜野弄りを再開しますかな。

「まあ仕方ないわ。体のメリハリについては諦めましょう」

「ほっ……」

「ではアカちゃん。せめて制服をもっと挑発的にしましょうか。某セレブ姉妹が着ていそうなものを……」

「そんな格好で生徒会長が闊歩している学校って、どうなのよ！」

「エキサイティングだわ」

「そんな一言で済まさないでよ!」

「それじゃあ、スカート丈をもうちょっと短くするか? 膝上三十センチぐらいに」

「ワ○メちゃんか! もうそれ全力で見えているから! 磯野さんちの次女並に丸出したから!」

「ほら、キー君も大喜びよ! 制服とスカート調達の為に早速知り合いのコスプレ愛好家に連絡を取っているみたいよ!」

「やめなさいそのエロ副会長!」

「ああ! 俺の携帯がー!」

「あらあらキー君、大号泣ね」

「男の涙大安売りね!」

「それならこのスカートどうなるんだよ!」

「蓮はいつの間に現物を調達したのよ! って、ソレ持ってこっち来るな! こ、の……でえええい!」

「ああっ!? 俺の夢と希望がああああああああ!」

「うちの男子勢は変態ばかりか!」

「ふう。仕方ないわね。男子サービスも兼ねた、アカちゃんの反省点のピックアップだったけど……どうもこの方向性じゃ、アカちゃんは意地でも受け入れられないようね」

「当たり前でしょう!」

「じゃあ今度は精神的な面でいきましょうか」

「そうよ! そうというのが普通——」

「アカちゃん。心が子供よ。もっと大人になりなさい」

「いきなり核心ついてきたあー! 今までがギャグだっただけに、妙にグサツと来たわ!」

「ギャグ? ……何を言っているんだ、桜野」

「どういう意味よおおおおおおお?」

桜野が動揺しつつ絶叫するという荒業を成し遂げていた。お、案

外器用な奴だな。

しかしそんなことができたところで俺達の弄りが止まるわけではない。

「アカちゃんは、やれば出来る子なんだから」

「なんか本格的に教育が始まったわ！ 同級生から、母性的な目で見られているわ、私！」

「えー？ やっても出来ないだろ、コイツは……」

「アンタ本当に私の親友！？ なんでそこまで私を追いつめようとするの！」

「そのためにはアカちゃん。まずは社会をその身で感じる必要があるわね」

「唐突な話題変換についていけないんだけど……。……。ああ、アルバイトとかしてみること？ なるほど、それは確かに一理あるかも—————」

「そう？ それなら早速、駅前に行って、スカート短くして、暇そうに佇んでみるのよアカちゃん」

「そこで俺の特製スカートが役に立つわけだ」

「そのうち脂ぎった中年のオジさんが『三万円はどう？』とか声かけてくると思うから、あとはそれに従えば、一発で大人の階段を—————」

「知弦は私の友達よねえ！？ 親友なのよねえ！？ 時々私、知弦との友情に全く自信がなくなるんだけど！」

「おい！ 俺との友情は！？」

「アンタなんかとっくの昔に幻滅してるわ！」

「あら、甘いわねアカちゃん。うちの弟なんかアカちゃんの性転換バージョンで大人の階段を昇ったことも—————」

「姉さんストップ！ その話はやめよう！ 全力で中止しよう！ さっきから真冬が凄い絶望したような目で俺を睨んでくるから！」

この世のすべてを恨むかのような視線で俺を見つめてくる真冬。俺は顔中に冷や汗をかきながら機嫌を取りまくったが……結局、今度真冬の家泊まることで事なきを得た。……そのときに真冬が、「いろいろと準備しないといけませんね♪」と言っていたのは気のせいであることを祈りたい。

「今何かとんでもない事実を聞いた気がするんだけど……」
「忘れろ、今すぐ。今聞いたことは一瞬で脳内から消すんだ」

必死の形相で懇願すると桜野はなんとか分かってくれたようで、それには一切触れてはこなかった。……ふう。

「アカちゃん。私達は親友よ。やーねー。こんなジョークに本気になるだなんて……」

「知弦……」

「今のは冗談よ。安心して、アカちゃん。アカちゃんの身体を他人に汚させるわけじゃないじゃない。もう。……汚していいのは、私達姉弟だけなんだから」

「飛び越したよ！　なんか今の発言で親友の域を飛び越したよ！　それと、一気に蓮の危険度が跳ね上がったよ！」

「姉さん……桜野は不倫相手ってこと？」

「なに前向きに発言してんのよー！　あなたには真冬ちゃんがいるでしょーが！」

「……盲点だった」

「一番重要なところ見逃しているじゃない！　真冬ちゃん、こんな無責任な彼氏で良いわけ！？」

「もちろんですとも」

「あなたも異常なくらい盲目的ね！」

「アカちゃん。私達がアカちゃんを汚しても大丈夫よ。なんたってマリア様は今、他のライトノベルを見ているから」

「意味が分からないわ!」

「まあ、それも冗談として……」

「知弦って、どこからが冗談なのかまったく分からないのよね……」

「あら、アカちゃん。そんなの簡単よ」

「え?」

「アカちゃんと接しているときの私は、基本的に全部偽りよ」

「友情があっさり壊れた!」

「ちなみに俺は基本的に真実だからな?」

「変態が本心かああああああああああああああ? 私、もう人が信じられないわよ!」

桜野ががっくりと肩を落としてうなだれる。お、桜野もようやく分かってきたか。

姉さんはそれを見て「そう!」と高らかに叫んだ。

「そうよ! それが社会の厳しさよ、アカちゃん! 簡単に人を信じたら痛い目にあうという教訓よ!」

「! こ、これが……」

「やったわ、アカちゃん! 貴女はまた一つ、大人になったわよ!」

「お、大人に? え、えへへ。……えーと、なんか素直に喜び辛いけど……」

「これでアカちゃんの反省点は、残り七千九百五十一個に減ったわ!」

「もう殺してえー! そんなに私が会長であることに文句があるなら、もう首を刎ねればいいのよおお——!」

うわ、ひでえ。

姉さんの言葉のナイフによりざっくりと心を貫かれてしまった桜

野は、再び机に突っ伏すと、わんわんと泣き出してしまった。……流石にやりすぎたか……？

思わずちらっとみんなを見る。

『（なんとかしろよへしてください）』

驚くべきチームワークだった！

な、なんだこいつらは！ 責任押しつけやがって！

しかしまあ、愚痴っても仕方がない。姉のやらかした落とし前は弟がつけないといけないと太古の昔から決まっているみたいだし。

大泣きしてしまった桜野を慰めるようにポンと、頭に手を乗せると、俺はため息交じりに行った。

「桜野は可愛い」

「……………ふへ？」

「どんなに駄目な鈍感人間でも、可愛けりゃ許される。芸能人とかでもそうだろう？ 杉崎にしてみれば、お前の七千九百五十一個の欠点を補って余りあるどころかプラスに傾く勢いだぜ？」

「な、なによそれ。そんなの……結局、容姿だけってことじゃない……………私なんて……ただの嫌われ者なんじゃない……………やっぱり」

慰め空しく、あまり回復しない桜野。……はあ、仕方ねえなあ。

ここからは真打の仕事だ。

「杉崎、後は任せたぞ」

「……………わかりました」

「へ……………？ 杉崎……………？」

「会長、さっきあなたは容姿だけと言いましたが……………何が不満だというのですか？」

「え？」

「欠点がたくさんあっても、それでも好きだと言ってもらえることの、どこが悪いというんですか？」

「杉崎……」

「俺や蓮さんはたまたま容姿って観点で語ってますけどね。他のメンバーだって同じですよ。それこそ、会長の欠点なんて、何千個という単位で皆思いついてしまいます。でも……誰か一言でも、会長のことが嫌いだなんて言った人間がいますか？」

「そ、それは……」

「じゃあ話を変えましょう。会長は……会長は俺のこと、嫌いですか？」

「え？　そ、そんなの————」

「悪いですけど。今回は真面目に答えてください。勘違いとかしませんから」

杉崎が真剣な眼差しで桜野を見つめる。桜野はその視線に一瞬たじろいだものの、ふいっと顔を背けて、ボソツと言った。

「……………好きよ、個人的には」

頬が赤くなっている。お、これはどうやら脈ありみたいだな、杉崎。

その桜野の反応に杉崎は我を忘れそうになったものの、すんでのところで踏みとどまり、ニコリと柔らかく微笑みかける。

「ありがとうございます。でも俺こんなだし……って自分で言うのもアレなんですけど。欠点とか反省点とかで見たら、会長からしたらボロボロ悪口出てくるでしょう？」

「と、当然よ！　いつも見ているんだから、杉崎の悪口なんて腐るほど出てくるわ！」

少しだけ元気になった桜野が胸を張って言う。なんか多少吹っ切れて告白まがいの言葉が漏れているが、大丈夫か？

「でも、それでも会長は俺のことを好きと言ってくれる」

「そ、それは……こ、言葉の綾で……」

そんなのに言葉の綾もあるかい。

「ええとじゃあ、まあ、それでいいです。会長は、俺のこと、多少どうであれ、好きだと思ってくれる。……たくさん悪口が思いつくのに」

「あ……」

「それと同じですよ、会長。まあ、俺から会長への感情は『好き』よりももっと強い『大好き』ですけどね。……そういう感情に、欠点だのなんだのって、関係ないんですよ。それは、皆同じです。俺とは意味は違っても、皆、会長のこと『大好き』なのは間違いないですよ」

「杉崎……皆……」

桜野がぐるりと周囲を見回す。俺を含む全員が、暖かい視線を桜野に向けていた。

「まあ、色々と反省すべきことはあると思いますけどね。会長も、俺も、それに皆も。だからと言って、欠点の数や得意なことの数だけが、その人間のすべてじゃない。だから会長。会長は自信持っていてと思いますよ？　たくさん欠点あるのに、それでも皆に好かれるって、それは尋常じゃない才能ですよ。誇ってください」

杉崎の言葉に、桜野はグッと袖で涙を拭う。

そして、多少元気を取り戻したように立ち上がると、俺達に向けて深々と頭を下げた。

「皆……ありがとう。反省点は多少頑張って減らしていこうと思うから、これからもよろしくお願いします」

桜野くりむの反省点数。残り七千九百五十個（ゆるやかに減少中）。



「それにしても、よかったんですか？ 先輩」
「ん？」

帰り道、俺は姉さん、椎名姉妹と共に帰宅の途についていた。

杉崎と桜野は二人で仲良く生徒会室で雑務に取り掛かっている。

桜野が珍しく手伝いたいと言ったのだ。

もちろん、杉崎は拒否した。美少女にそんなことやってもらうわけにはいかない、と。

しかし、桜野は断固として譲らなかった。絶対に手伝う、一人ではやらせない、と。

結局会長命令という形で二人の共同作業を行っているのだ。

真冬は俺の腕に抱きつきながら、不思議そうに聞いてくる。

「会長さん、あのままだと反省点をなかなか改善できないと思いますよ？　自分でできるなら、最初からしているでしょうし」

「ああ、そのことか。……ま、いいんじゃないか？　別に」

「別に、って……アンタそんなに適当でいいのかよ？」

俺の返事に深夏が呆れたような表情で俺を見る。まあ、言いたいことはわかるけどな。

「いいじゃねえか。確かに改善しないのは問題だけど、杉崎も言った通り、人間の価値はそんなもんで決まるわけじゃねえんだし」

「そりゃそうだが……」

「まあまあ、そこまでしておきなさいな。蓮もキー君も、それぞれの考えがあってああしたわけなんだし。何もしてない私達が口を出すっていうのも野暮よ」

ニコツと笑う姉さんが、深夏をやんわりと窘める。相変わらずこういうところは大人っぽいよな。

「とにかく、今日はもういいさ。この話はここで終了ってことで」
「……まあ、いいけどよお」

ブーたれる深夏。子供かよ、お前は。
そして、そうこうしているうちに分かれ道へとたどり着いた。

「それじゃ、また明日な」

「はい。今日もメールしますね？」

「あらあら、アツアツね。二人とも」

「真冬が男に興味持ったのは喜ばしいことなんだけどな」

それぞれが言葉を交わし、帰宅していく。

俺は姉さんと二人で歩きながら、空を見上げ、小さな声で呟いた。

「俺の人間の価値は、どれぐらいなんだろうな……」

「ん？ 何か言った？ 蓮」

「ううん、なんでもないよ」

その日はなぜか、とても悲しい夢を見た。

第一話 反省する生徒会？（後書き）

感想、お待ちしております♪

第二話 雑務する紅葉蓮？（前書き）

こんばんは☆

みなさんは生徒会の金蘭、買いましたか？ ネタバレになるのであまり詳しくは話ませんが、めっちゃ面白かったです！ 購入してない方は是非お買い上げを。

さて、今回の話は、以前募集していたオリキャラ達が出演する話です。「自分のキャラだ！」なんて思いながら読んでくれると嬉しいかも。

ちなみに、キャラ募集はまだ行っていたりしますので、お待ちしています。

それでは、お楽しみください♪

第二話 雑務する紅葉蓮？

とある土曜日の放課後。

授業も半ドンで終了し、生徒達が部活や委員会活動に勤しんでいる中、俺こと紅葉蓮は生徒会室にひきこもり一人っきりで雑務をこなしていた。

と、いうのも、今日はなぜか俺以外のメンバーが揃いも揃って用事、しかも割とガチな感じのヤツがあったからだ。真冬は少し申し訳なさそうだったのに対し他のメンバーがニヤニヤしていたのは流石にイラッとした。畜生、覚えてやがれよ。

通常なら、人数不足でお開きになるのだが、こういう日に限って雑務が大量に押し寄せた。新任の真儀瑠紗鳥なる人物が色仕掛けで迫ってこなければ、俺も荷物を纏めてさっさと帰宅の途についていただろう。我ながらなんたる不覚。……いい胸してたな。

そんなわけで、俺は一人寂しく仕事マシーンとしてせっせと雑務の山をこなしているのだ。

……しかし、

「一人っていうのは、なあ……？」

流石に寂しい。いつもなら雑談相手の杉崎がいるが、今回はそれもない。俺の言葉も空しく宙に消えていくだけだ。

さて、どうしたものか。と、打開策を模索し始め、十分が経過し

ようとした時だった。

コンコン

「ん？」

突然、生徒会室の扉が何者かによってノックされたのだ。誰だろうか。

訝しげにそのままジーツと扉を見てみると、いつまでたっても返事がないことにシビレを切らしたのか、若干乱暴気味に勢いよくドアが開かれた。

「すいませーん。どなたかいらっしゃいませんか……って、あなただけですか、紅葉弟先輩」

「おまえな……その他人行儀な呼び方はどうにかならんのか？ ヒロ」

俺は溜息を一つついて、ドアの向こうに立っている黒髪メガネの少年を見る。

身長は若干低めだが、総合的にはバランスがとれた理想的な体型。実用性抜群そうな黒縁メガネを着用しているせいか、ガリ勉っぽく見えてしまう、そんな少年。

俺はその弟分———水無月大雨^{みなづきひろさめ}の方へと、足を進めた。

「よ、相変わらず小さいな」

「いきなり暴言で会話を始めますか、あなたは」

「あーもーなんでそんなよそよそしいんだよ？ 昔みたいに『蓮兄』って呼んでくれてもいいんだぜ？」

「お断りします。高校生にもなって恥ずかしいですって」

「そうかい。……んで？ 今日は一休生徒会室に何の用だ？」

「あ、はい。例の如く部長からの雑用ですよ。新しく小説を出版したいから生徒会に許可を取ってこい、だそうです」

「またかよ。文芸部だっけか」

「はい。部っていつでも活動内容は同好会レベルですけど」

「それは一役員として見逃すべきなのか？」

「是非」

苦笑しながらも、俺の会話に付き合ってくれるヒロ。うむ、丁度いいタイミングで来てくれたものだ。

一応出版の件については後日会議で話し合うということで落ち着いた。どうせ今日は俺以外いないし。

「わざわざすみません」

「いいって別に。これも生徒会の仕事だしな。……まあ、お礼言ってくれるなら一つ頼みたいことがあるんだけど」

「はい？ なんですか？」

コクン、と首を傾げる。俺はそんな小動物のような挙動に和みながらも、長机から一枚の紙を手に取り、ヒロの方へと向けた。

ヒロはまじまじとその紙を見る。

「部活要望調査票？」

「ああ。部活動の奴らのところにいつて苦情とか要望とかをメモって来ないといけないんだ。後で行こうと思っていたけど、手伝ってくれないか？ 今から少しさ」

「そんなことなら構いませんけど……先輩、もしかして寂しかったんですか？」

「……………うん」

「小学生じゃないんだから……まあ、わかりました。お手伝いしま

すよ」

まったく、言いながらも苦笑いしつつ応じてくれる。相変わらず細かいところで気が利く奴だな。

しかしまあ、仲間が増えたことはありがたい。ヒロの気が変わる前にさっさと出発するでしょう。善は急げともいうし。

「そんじゃ、行くか」

「はい」

俺達はそれぞれの用紙を持ち、生徒会室を後にした。



「まずは比較的近くにある文化部棟からだな」

「文化部って意外と苦情多そうですね。文芸部所属の自分が言うのもなんですけど」

「そうなんだよな。大体、この学園の部活腐敗状況からして既に末期なんだけど」

空を飛部ってなんだよ。鳥人間コンテストにでも出る気か、ここ
の生徒は。

まあいつまでも愚痴を言っても仕方がない。とりあえず、文化部棟の入り口側にある部室から訪ねることにした。

「科学部、ですか？」

「ああ。俺個人的にはこの部員苦手なんだよな……」

「なんでまた。先輩が人を嫌うなんて珍しいですね」

「お前も実際に会ってみるとわかるさ。俺みたいな凡才は、天才なんかを理解できないってことにさ」

「いや、先輩もある意味天才の部類でしょう……」

む、珍しくヒロに褒められたな。帰ったら姉さんに自慢してやろう。

深呼吸を何度かして、気持ちを落ち着かせる。大丈夫。クールになれば大丈夫さ。

「いざ……」

「なんでいちいち劇画チックなんですか……」

隣でヒロが呆れているが、そんなことに構っている余裕はない。俺は今からおそらく今月最大のピンチを迎えるだろうから。

意を決して、ドアを……開く！

「オープ——」

「あ！ 今開けたらガラポンが……」

「キシャアアアアアアアアアアアア？」

『蛇いいいいいいいいいいいい！？』

部室に入るや否や、突如として俺達に襲い掛かってきた謎の蛇。全長三メートルはあろうかというその巨体は、今にも俺達を押しつぶさんとするかのごとく波打っている。口元にはおそらく毒がある

であろう一対の牙が怪しい輝きを放っていた……………って、

「死ぬ！ さすがに蛇は死ぬ！」

「ちよっと！ 先輩がどいたら自分の方に来るじゃないですか！
しつかり頑張ってくださいよこの使い捨て人型装甲板？」

「てめえコラヒロ！ 兄貴分に向かってなんてこと言いやる！
本来ならお前を盾にしているところだつうの！」

「先輩、あなたのことはどん〇衛が完成するまで忘れません」

「三分！？ 忘れる気満々じゃねーかっ」

「……………いきなり部室に入ってきて随分と騒がしいね。そんなに
ボクの実験の邪魔をしたいの？」

突発的命の危機に俺達が混乱している中、蛇の飼い主兼科学部の
エースは嘆息しながらフラスコ片手に俺達を睨んでいた。

このヤロウ……………いったい誰のせいだと思ってやがる……………。

「まったく……………たかがガラガラヘビ一匹に大の高校生が二人してな
にビビっちゃってるのか」

「お前の高校生の定義をぜひとも教えて欲しいところだ」

「少なくとも、爬虫類に腰を抜かすような弱虫じゃないということ
だけ先に言っておくよ」

「殺しましょう、先輩。このチビ実験オタクは全身縛ってアマゾン
奥地にでも放置してくればいいんです」

「爬虫類と触れ合えるなら大歓迎だけどね。後、お前にはチビって
言われたくないよ」

『……………（メンチの切り合い）』

「…………シヨタとメガネの威嚇ってなんかシュールだよな」

『黙れシスコン』

「適確かつ確実に俺のトラウマを決る暴言を真っ先に向けやがった
！」

うん、こいつらは敵にまわしちゃいけない。俺の衰えに衰えた野生の勘が警鐘をガンガン鳴らしている。

「やれやれ」と俺は頭を掻きながらも、なんとか立ち上がり、科学部部員のもとまで足を進めた。

「まったく……相変わらず爬虫類オタクだな、前野」

「あなたも相変わらず面白いね、地味男」

「それ以上言うところの部活の部費をゼロにするぞ」

「やれるものならやってみなよ。ボクが全校生徒にデモを訴えかけるから」

ふん、と偉そうに鼻を鳴らす少年、まえのしきみ前野櫛。

飾り気のない黒髪で、長くもなく短くもなくといったところ。顔は童顔で銀縁めがねをかけている。のほほんとしているのだが、結構の天然でもある。それでいて、なかなか頭の良い奴で、俺に対しては何かと強気&偉そうに振る舞える状況をつくってしまうのだ。迷惑な奴。

「ほとんどの部活や委員会にコネを持っている奴が言うところにならんからやめろ」

「あくまで暇つぶしの一環なんだけどね。ほら、実験ばかりだと退屈でしょ？ たまには椎名の剛速球を打ちたくなるんだよ」

「さらっと化け物じみた発言するな。あいつの球何キロ出てると思ってる」

「162キロだよ。前にボク自作のスピードガンで測ったから、間違いない」

「プロでも無理だっつうの」

なんでこの学園にはこうも人外能力者が集まるんだろうな。

「先輩、早く本題に入りましょうよ」

「おっと、そうだったな。つい流されてた」

いつまでも雑談を続けている俺に、呆れた様子でヒロが声をかけてくる。こうやって手玉に取られるから前野は苦手なんだよな……。とりあえず一応用紙を取り出し、質問を開始する。

「そうそう、そもそもの用事がコレなんだけど」

「要望調査？ 生徒会もこんな真面目なことするんだね」

「言うな、気にしているんだから」

「今更始まったことじゃないでしょ。で、何か要望はありますか？」
「要望ねえ……」

うーん、と小柄な体を更に小さくして、考える前野。なんかこうしてみると本当小学生みたいだな。

しばらくじつくりと熟考して、前野はこう言い放った。

「変えて欲しい校則があるんだけど」

「校則？ なんでもた」

「ほら、この学園の校則にさ、『ペットや昆虫など、生き物を持ち込まないこと』っていうのがあるじゃない？」

「ああ、なんかペットとかを持ち込む人が出ないようにとか言っ去年から増えたっていうヤツですね」

「そうそう。でもさ、ペットって実際大切だと思うんだよ。アロマセラピー的な役割として」

「そう言われてみるとそうだな……学校で猫とかと触れ合えたら俺も嬉しいし」

「でしょ？ だからさ、変えて欲しいんだよ。みんなで動物と触れ合ったら、更に学校生活も楽しくなると思うよ？」

「一理ありますね。先輩、一応書き込んどきますか？」

「あ、よろしくたのむ」

「ほんっと頼むよ。……………このままじゃガラポンをこの部屋から出せないんだから」

「速攻で消せ、ヒロ」

「了解」

消しゴムですぐさま消去していく弟分。危ねえ……………このままだと『ドキッ！ 爬虫類だらけの碧陽学園☆』になるところだった……………。

「あー！ なんで消すのさ！」

「てめえの言うペットの定義が常識からかけ離れてんだよ！」

「ボクの理論に常識は通用しないよ」

「メルヘン野郎かつ」

まあとにかく、目的自体は果たせたからよしとするかな。

「変えてよねー！」と叫び続ける前野をひたすら無視して、俺と

ヒロは次の目的地へと足を進めたのだった。

第二話 雑務する紅葉蓮？（後書き）

感想、オリキャラ、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3827q/>

生徒会の一存～もう一人の優良枠～

2011年10月29日15時24分発行